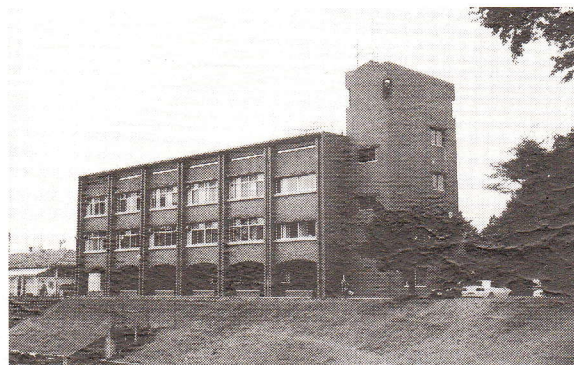
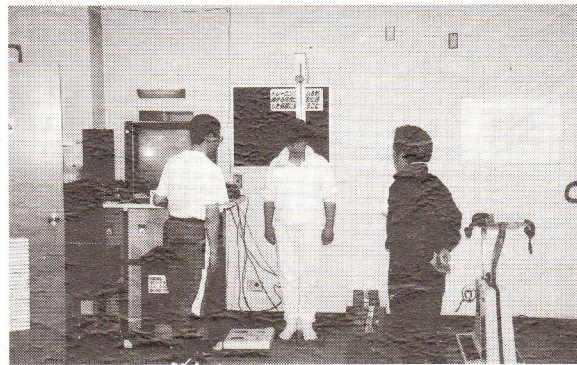


平成 8 年度

慶應義塾大学体育研究所

活動報告書



目 次

巻頭言	1
体育研究所所員及び所内組織図	2
平成8年度体育研究所人事	3
第1部 研究分野	
1. 個人研究業績	5
2. 所内定例研究会発表要旨	9
3. 体育研究所プロジェクト研究について	19
第2部 教育分野	
1. 平成8年度カリキュラム概要と履修統計	21
2. 平成8年度スポーツクラス履修者アンケート集計結果	27
3. 新カリキュラムの経過と教育分野の今後	41
第3部 スポーツ振興分野	
1. 各種スポーツイベントの開催	45
2. 大学生活懇談会とのタイアップ事業	49
3. 横浜市民講座への講師派遣	50
4. 所内施設の開放	51
編集後記	52

巻 頭 言

体 育 研 究 所

所 長 高 嶺 隆 二

大学における体育の実施は、1946年（昭和21年）にアメリカ教育使節団によって出された勧告によって文部省に設けられた学校体育研究委員会がまとめた文部大臣への要望を受けて、1949年の新制大学の発足にあわせて初めて正課の教育科目とされたものである。その内容は、大学基準協会の定める単位数（120単位）に保健教育、体育理論（体育概説）等の講義2単位と体育実技2単位の計4単位を加えるというものであった。塾では、当時の体育保健研究委員会の中心メンバーであった故浅野均一先生を筆頭に塾内外の関係者（体育会OB等）の協力を仰ぎ指導体制を整えて実施した。

体育研究所は、1961年（昭和36年）に設立され、大学体育科目の設置以来一貫して体育学研究的の推進と大学学部の学生に対する保健体育科目の教育を主目的として推移してきている。

体育学は、主として「人間の運動」を対象に、いわば身体の側から人間を総合的に探求する分野の学問であり、自然科学、社会科学、人文科学の諸科学を応用した多岐にわたる広い領域を持つものである。所員20名（嘱託助手4名を含む）は、それぞれに個人研究または共同研究として個々人の探求心を燃やしている。

さて、教育面では、平成5年度からは保健体育科目が各学部の選択科目として取り扱われるようになったのであるが、8年度をもって4年を経過した。すなわち、学生が一回りしたことになる。この間は、必修から選択への転換に伴う所員の意識改革、学生のニーズに対応するよう大幅に増やしたスポーツ種目の履修登録で予想される混乱への対策に追まぐられた年月であった。当初、所内では研究所の存続も危ういとの危惧も論じられるほどであったが、毎期末の学生のアンケート（授業評価を含む）の集計を参考に年度毎の設置科目（種目）の見直し、修正を重ねた結果、学生の履修動向はほぼ安定し、全学年にわたり履修者数は毎年漸増傾向で経過している。今後は、この4年間の実績を踏まえ、塾における保健体育教育のさらなる充実を図りたい。

また、体育研究所は、単に大学教育の一分野を担う機関としてではなく、小学生から大学院生まで存在する慶應義塾の体育・スポーツ文化の進行ならびに塾で働く人々の健全な社会生活の構築をサポートする機関としての中核となるべく努力したい。

最後に、大学設置基準の大綱化に伴う学部カリキュラム編成の複雑な作業のなか、保健体育科目の位置づけやその取り扱い等にご尽力下さった諸先生、複雑な履修登録作業にご協力いただいた教務部の職員の方々に対し平成8年度の活動報告書の発行を機会に感謝の意を表し巻頭の言葉としたい。

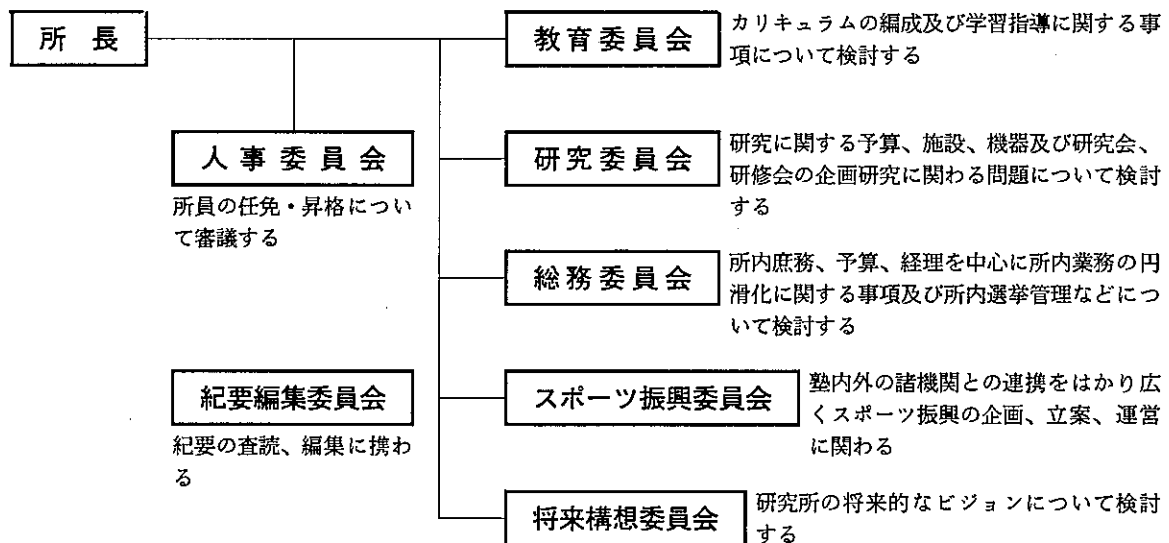
体育研究所及び所内組織図

平成8年3月31日現在

体育研究所所員名簿

氏名	所属委員会
所長 高嶺隆二	人事委員会、紀要編集委員会
教授 橋本治雄 今栄貞吉 近藤明彦	人事委員会、紀要編集委員会 人事委員会、スポーツ振興委員会、紀要編集委員会 人事委員会、教育委員会、紀要編集委員会
助教授 安藤勝英 篠原しげ子 植田史生 綿田博人 松田雅之	人事委員会、総務委員会 研究委員会 人事委員会、研究委員会、将来構想委員会 スポーツ振興委員会 教育委員会
専任講師 清水直臣 佐々木玲子 石手靖 山内賢 吉田泰将 加藤大仁	総務委員会 教育委員会 教育委員会、将来構想委員会 研究委員会 教育委員会、将来構想委員会 将来構想委員会
助手 村山光義	研究委員会、総務委員会、将来構想委員会
助手(嘱託) 野口和行 上向貫志 田中伸明	スポーツ振興委員会、総務委員会 教育委員会、研究委員会 スポーツ振興委員会

体育研究所組織図



平成8年度体育研究所人事

平成9年3月31日付

清水直臣 (専任講師) 退職

体育研究所体育委員会委員

(平成9年4月1日現在)

委員長	体育研究所長	高嶺隆二
委員	文学部長	関場武
	同日吉主任	末吉雄二
	経済学部長	飯田裕康
	同日吉主任	田中淳一
	法学部長	山田辰雄
	同日吉主任	筑紫文耀
	商学部長	黒田昌裕
	同日吉主任	湯川武
	医学部長	猿田享男
	同日吉主任	沼崎雅行
	理工学部長	安西祐一郎
	同日吉主任	村瀬旻
	体育研究所教授	橋本治雄
	同	今栄貞吉
	同	近藤明彦
	体育会理事	池井優
保健管理センター所長	斉藤郁男	
スポーツ医学研究センター所長	山崎元	

第1部 研究分野

概 要

体育研究所における研究活動の対象である体育学は、基礎的諸科学の応用・複合的分野である。そのため、現在各所員の研究課題は多岐にわたり、その探求方法も多様である。具体的には、スポーツ心理学、スポーツ生理学、バイオメカニクス、スポーツ医学といった自然科学のスポーツへの応用や、スポーツ社会学、スポーツ法学、スポーツ史等の人文・社会科学のスポーツへの応用分野の研究である。また、そうしたスポーツ諸科学をさらに活用し、スポーツの指導・実践に役立てるコーチ学、武道論や、教育活動に役立てる教科教育、野外教育の実践研究も行なわれている。こうした、研究業績について第1節にまとめた。

続いて、各所員間の研究分野の理解と交流、研究活動の活性化の目的で、月例で行なわれている所内研究会について、発表要旨を第2節にまとめた。

さらに、平成8年度は、研究所としてのプロジェクト研究を継続的に実行することが計画された。この計画は年度途中からの立案であったが、所内研究委員会を中心に、慶應義塾の今後を指向して大テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」を設定した。プロジェクトの詳細と進行状況について第3節にまとめた。

1. 個人研究業績

1) 論文・報告書 ※著者欄のアンダーラインが専任教員を示す

著 者	タ イ ト ル	誌 名	巻 号	頁	発行年月
久枝 光、吉川 宏起、大友 邦、 村山光義、沢井 史穂、久野譜也、 福永哲夫	筋機能に及ぼすレジスタンストレーニングの影響 中高年齢者を対象としたレジスタンストレーニングにおける筋横断面積の変化	平成7年度(財)日本 体育協会 中高年 者の筋機能向上に 関する研究プロジェ クト報告集	第3報	P. 60-63	1996. 7
安部 孝、 <u>村山</u> <u>光義</u> 、市之瀬慈 歩、沢井史穂、 福永哲夫	筋機能に及ぼすレジスタンストレーニングの影響 筋力トレーニングが内蔵脂肪量および皮下脂肪分布に与える効果	平成7年度(財)日本 体育協会 中高年 者の筋機能向上に 関する研究プロジェ クト報告集	第3報	P. 64-67	1996. 7
沢井史穂、 <u>村山</u> <u>光義</u> 、勝又 宏	実際の条件下で実施した中高年者の筋力トレーニングの効果に関する研究 中年者の筋力トレーニングによる日常生活動作のパフォーマンス向上効果に関する検討	平成7年度(財)日本 体育協会 中高年 者の筋機能向上に 関する研究プロジェ クト報告集	第3報	P. 70-76	1996. 7
村山光義、勝又 宏、沢井史穂	実際の条件下で実施した中高年者の筋力トレーニングの効果に関する研究 筋力トレーニングによる中年者と若年者の1RM 向上率の比較	平成7年度(財)日本 体育協会 中高年 者の筋機能向上に 関する研究プロジェ クト報告集	第3報	P. 77-82	1996. 7
<u>佐々木玲子</u>	幼児のリズミカルな反復動作における上下肢の協応～テンポの違いによる動作パターンの変容～	発育発達研究	24号	P. 45-51	1996. 7

著者	タイトル	誌名	巻号	頁	発行年月
永田俊勝、大下聖治、山内賢	文学部女子学生の体力の現状 ——1992年度から1996年度——	関東学院大学文学部紀要	78号	p. 279 -300	1996. 12
村山光義、佐々木玲子、近藤明彦	学生の health related physical fitness の実態調査	東京体育学研究	1996年度報告	p. 19-25	1996. 12
勝又 宏、綿田博人、石手 靖、村山光義、川合武司	異なる速度の投球に対する打撃動作の準備局面における荷重移動様式について	スポーツ方法学研究	Vol. 10(1)	p. 51-67	1997. 3
上向貫志	スポーツ傷害の心理学に関する研究展望	体育研究（中央大学紀要）	第31号	p. 13-25	1997. 3
上向貫志、竹之内隆志	スポーツ傷害の受容に関する事例研究	総合保健体育科学	20巻1号	p. 99 -106	1997. 3
上向貫志、奥田援志	運動領域の知識ネットワークの分析	身体運動文化研究	4巻1号	p. 17-24	1997. 3
上向貫志	スポーツ傷害の心理学的研究への障害受容理論の適用	慶應義塾大学体育研究所紀要	36巻1号	p. 1-9	1997. 3
田中伸明	自己制御の観点からみたスポーツ選手の荷重点と姿勢の特徴について	慶應義塾大学体育研究所紀要	36巻1号	p. 11-18	1997. 3
安藤勝英	半月板損傷および前十字靭帯損傷における術後のリハビリテーションプログラムの変遷	慶應義塾大学体育研究所紀要	36巻1号	p. 19-49	1997. 3
佐々木玲子	女子大学生の身体活動量と体力水準に関する実態調査	慶應義塾大学体育研究所紀要	36巻1号	p. 51-58	1997. 3
村山光義、田中伸明、石手 靖	新カリキュラムにおける体育実技履修学生の運動活動に関する調査	慶應義塾大学体育研究所紀要	36巻1号	p. 59-66	1997. 3
野口和行、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、田中伸明	シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」における学生による授業評価——総合評価に寄与する要因について——	慶應義塾大学体育研究所紀要	36巻1号	p. 67-74	1997. 3
高嶺隆二 (監)、Dr. Treffene	ハートレートモニタリングとトレーニング	スイミングマガジン	20巻10号	p. 84-85	1996. 9
高嶺隆二 (監)、Dr. Treffene	ハートレートセットとは何か	スイミングマガジン	20巻12号	p. 63-65	1996. 10
高嶺隆二 (監)、Dr. Treffene	トレーニング・コントロールとハートレートのモニタリング	スイミングマガジン	20巻13号	p. 83-85	1996. 11
高嶺隆二 (監)、Dr. Treffene	クリティカルタイムとレースペース——トレイシー・ウィッカム選手の成功例	スイミングマガジン	20巻14号	p. 64-66	1996. 12
高嶺隆二 (監)、Dr. Treffene	グリコーゲンの回復時間と練習プログラム	スイミングマガジン	21巻1号	p. 64-65	1997. 1

著 者	タ イ ト ル	誌 名	巻 号	頁	発行年月
高嶺隆二 (脚)、 Dr. Treffene	運動強度と主なエネルギー源	スイミングマガジ ン	21巻 2 号	p. 68-71	1997. 2
高嶺隆二 (脚)、 Dr. Treffene	ディスタンス選手とスプリンターの 乳酸との関係	スイミングマガジ ン	21巻 3 号	p. 70-72	1997. 3
上向貫志	インステップキックを科学する	サッカーダイジェ スト	18巻14 号	p. 4-7	1997. 3
上向貫志	サッカーシューズの進化と発展	サッカーダイジェ スト	18巻15 号	p. 8-9	1997. 3

2) 学会発表 ※著者欄のアンダーラインが専任教員を示す

発 表 者	タ イ ト ル	発 表 学 会 名	発 表 年 月
村山光義、米田継武、南 谷和利、久野譜也、福永 哲夫	荷重-変位関係による大腿部の筋の硬 さ評価について	第4回日本運動生理学会	1996. 7
Dieter Teipel, Souichi Ichimura, Mitsuhiro Matsumoto, Yoshio Su- giyama, <u>Kanshi Uemu- kai, Akihiko Kondo</u>	Assessment of psychological stress conditions in German and Japanese soccer players.	Xth International Society for Comparative Physical Education & Sport	1996. 8
<u>佐々木玲子</u>	大学生の身体活動量と体力水準につ いての実態調査	第51回日本体力医学会	1996. 9
村山光義、勝又 宏、沢 井史穂、福永哲夫	筋力トレーニングによる若年者と中年 者の1RM向上率の比較	第51回日本体力医学会	1996. 9
沢井史穂、福永哲夫、 <u>村 山光義、勝又 宏</u>	筋力トレーニングによる日常生活動作 のパフォーマンス向上効果	第51回日本体力医学会	1996. 9
勝又 宏、綿田博人、石手 靖、 <u>村山光義、川合武司</u>	打撃動作の準備局面における荷重移動 様式に関する一考察	第47回日本体育学会	1996. 9
<u>野口和行、吉田泰将、佐々 木玲子、村山光義、田中 伸明</u>	集中授業「アウトドアレクリエーショ ン」における学生による授業評価	第16回日本スポーツ教育学 会	1996. 10
<u>佐々木玲子</u>	子どもの打叩動作テンポ調整の発達特 性	第13回日本バイオメカニク ス学会	1996. 11
田中伸明、水野忠和、 <u>近 藤明彦</u>	テニスプレイヤーに必要な集中力とは —大学テニスプレイヤーの調査から—	第8回日本テニス学会	1996. 11
<u>野口和行、桃井奉彦</u>	ネイチャースキー教室の参加者につ いて	日本レジャー・レクリエー ション学会第24回大会	1996. 11
<u>上向貫志</u>	スポーツ選手が怪我を受容するには	第23回日本スポーツ心理学 会	1996. 11

発 表 者	タ イ ト ル	発 表 学 会 名	発 表 年 月
近藤明彦、佐々木玲子、 村山光義	学生の health related physical fitness の実態調査（その2）	第24回日本体育学会東京支 部会	1997. 3
田中伸明、水野忠和、近 藤明彦	テニスプレイヤーの注意の集中に關す る一考察	日本体育学会東京支部第24 回大会	1997. 3
村山光義、久野譜也	大腿部筋硬度測定時の MR 画像	第109回日本体力医学会関 東地方会	1997. 3

3) 平成8年度慶應義塾学事振興金援助研究

研 究 者 名	研 究 名	個人・共同の別	金 額
近藤明彦、佐々木玲子、 村山光義	塾生及び教職員を対象とした体力診断・運動処方シス テムの開発	共 同	40万
佐々木玲子	一般成人の身体活動量と体力水準に関する実態調査	各個研究	B
村山光義	MRI を用いた筋の硬さ測定法の検討	各個研究	B

4) 慶應義塾派遣留学

氏 名	研 究 課 題	留 学 先	期 間
加藤大仁	1. スポーツ政策形成過程に関する一考察 ——Pluralism, Corporatism 論を中心として 2. 現代バスケットボールにおける諸攻撃法の検討Ⅱ ——1-4 Offense——	University of San Jose	95. 8～

2. 所内定例研究会発表要旨

体育研究所では、月に1回下記の目的で研究会を行っている。

- 1) 所内の研究の活性化
- 2) 各所員の研究分野の理解

定例研究会の他、不定期で学会発表の予演会も行っている。以下に、定例で行われている研究会の発表内容について報告する。

1) 第1回 4月12日(金)

(1) 田中伸明「大学テニスプレイヤーの集中力と競技力との関係」

本研究では、大学テニスプレイヤーに対し、調査を行い、集中力と競技力の関係について検討することを目的とした。ここでの集中力とは、注意の集中であり、Nideffer が説明している方向性(内-外)と、注意の幅(広-狭)として捉えた。調査対象は、各大学男子テニス部員99名であった。集中力の測定には、T-TAIS (Tennis—Test of Attentional and Interpersonal Style) を使用した。T-TAIS は、Nideffer の作成した TAIS をもとにして、テニス用に改良されたものである。T-TAIS の尺度は、①BET (広い外的な注意)、②OET (外的な刺激による過剰負荷)、③BIT (広い内的な注意)、④OIT (内的な刺激による過剰負荷)、⑤NAR (狭い注意の集中)、⑥RED (狭すぎる注意の集中) の6尺度である。競技力について検討を行うために、上位群、中位群、下位群の3群に群分けした。その結果、得点が高い方が望ましい BET、BIT、NAR において、有意差がみられたのは上位群と下位群の BET のみであった。また、有意差はみられなかったものの BET、BIT、NAR の得点は、競技力が上がるにつれ得点が高かった。これらの結果より、競技能力の高い選手の方が、BET、BIT、NAR の能力が高いということが推測できた。また、得点が高い方が望ましい OET、OIT、RED において、有意差がみられたのは、中位群と下位群の OET、OIT であり、中位群の得点が低かった。また、有意差はみられなかったものの RED においても中位群の得点が低かった。上位群と中位群においては、有意差はみられなかったが上位群の方が得点が高かった。中位群と比較して、上位群と下位群は同じように得点が高かった。上位の選手と下位の選手で同じ得点を示したが、これは、集中力の感じ方が違うといったことや、上位の選手の方が無意識に集中しているためにこのような結果になったのではないかと考えられる。しかしながら、n数が少ないために集中力と競技力の関係について明らかにはできなかった。したがって、今後、n数を増やし、集中力と競技力の関係について検討する必要があると示唆された。

(2) 安藤勝英「術後の膝部 REHABILITATION について」

膝傷害後、或いはその手術後に膝部が不安定のある場合には、膝周囲筋群の強化がリハビリテーションの最大の目標となる。いずれの場合も急性期で安静を必要とするが、その時期が過ぎるとリハビリテーションの開始が必要となる。又、この部位の再受傷の予防としてもリハビリテーションの知識と方法が必要である。

1975年前後から全米各大学でリハビリテーションの目的で、Cybex Machine 等の Isokinetic の機器が盛んに使用されるようになった。同じように、Isokinetic Exercise の器具として、Orthotoron、Fitoron もリハビリテーションの目的で使用され始めた。

Isokinetic Exercise が可能な器具の登場でそれ以前のリハビリテーションプログラムの方法が変わったが、その後膝の手術方法の改良、リハビリテーションの症例数の積み重ね等によってリハビリテーションプログラム改善されていった。DR. CAMBEL, DR. SHELBOURNE 等の研究では、前十字靭帯 (Anterior Cruciate Ligament) 損傷の場合、手術後の初期での Cybex M. の使用は、リハビリテーションプログラムの中での実施内容としては負荷が強すぎるとして、二次損傷を防ぐ為の确实で段階的なりハビリテーションプログラムが研究され、現在では医師との連携をもつトレーナー、理学療法士 (Physical Therapist 一般に P. T. と称される) によって、これらの考えをもとに実施されている。

Cybex M. の登場はリハビリテーションプログラムに画期的な変革をもたらしたのであるが、以来20年余りでその使用時期をめぐって、膝のリハビリテーションプログラムの実施方法が変わってきた。本研究では、膝のリハビリテーションプログラムがこの20数年、主に米国カリフォルニア州立サンノセ (San Jose) 大学においてどのような考え方が基礎となり現在に至ったかその変遷について調査し、その結果現時点における最適なリハビリテーションがどのようなものであるか、具体的な実施方法を検討し明らかにした。

2) 第2回 5月31日 (金)

(1) 上向貫志「スポーツ傷害の受容に関する研究」

怪我から競技に復帰するためには、適切で効果的なりハビリテーションが不可欠である。言わずと知れたことではあるが、医学領域におけるリハビリテーション医療は、独自の専門領域として発展しており、その基本アプローチの一つとして心理的アプローチが重要であることは周知のとおりである。主に身体障害者を扱うこの種の領域では、障害の受容が問題解決のキー・コンセプトとされている。この受容に関する研究は、それほど多くはないが、障害から受容に至るプロセス、つまり受容過程に焦点があてられ行われてきた。この受容過程というテーマに関する研究では、喪失体験、あるいは挫折体験からの立ち直りの特殊な場合と考え、その切り口から研究が進められている。受容の本質について、ライトは明確にそれは「価値の転換」であると述べている。元来、喪失の受容というテーマから「価値の転換」を唱えたのはデンボーであり、ライトはそれらを発展させ、①価値範囲の拡大、②障害の与える影響の制限、③身体の外観を従属的なものとする、④比較価値から資産価値への転換、といった4つの側面にまとめている。スポーツ選手の怪我はある意味での対象喪失であるという視点から、様々な情緒体験を経て受容に至る、最終的に自己の怪我を受容することが健全な復帰への近道であると考えられる。そこで、“受容”といったことをもう少し深く理解できないだろうかと思い、先述の論文で引用されている「価値の転換」に焦点を当ててみることにした。ライトはこの価値の転換を発展させ、その内容と心理的メカニズムについて詳しい分析を行ない、その中で価値の転換の内容をなし、同時にそれを促進する因子ともなる4つの側面を指摘している。これらに基礎を置き、スポーツ傷害独自の受容に関する詳細とその心理的メカニズムについて研究を行なうための研究計画案を目的とした発表を行なった。

(2) 村山光義「塾生の Health related physical fitness レベルについて——トレーニングルーム健康体力テスト結果から——」

諸外国において体力を「健康に関連する体力要素」と「運動能力」という2つの側面から捉え、health-related physical fitness (以下 HRPF) のテストが提唱されて久しい。しかし、わが国においては、多人数を一斉に測定できるような運動能力評価中心のバッテリーテストが多く、HRPF を評価するテストについて、十分に実施・検討されるに至っていない現状がある。そこで、HRPF に関する幅広い年代層の実態把握を目指し、平成7年度より体育研究所内トレーニングルームにおいて健康体力テストをシステムとして組み入れた。本研究では、1年間の測定結果から、学生(1, 2年生の男女345名)の HRPF レベルを集計し、今後への基礎データを得た。

健康に関連する体力要素として、心肺持久力、筋力・筋持久力、身体組成、柔軟性にパワー要素として自転車こぎダッシュを加えた。測定した5種目を総合的に評価するため、便宜的にTスコアによって得点化した。そのために、既存の標準値(ノルム)から、測定機種に最も即したものを選定した。

Tスコアの総得点は男女とも平均で250点を越え、既存の標準値と比較すると、本対象者の HRPF の総合評価は比較的良好な結果であった。しかしながら、各種目間には得点差があり、種目のバランス面でよい状態とはいえず、体力要素に差がある事が問題として指摘出来た。すなわち、全身持久力、筋力項目では高得点で、柔軟性、パワーが劣る結果であった。この点には、既存ノルム間の差が大きいことも指摘された。今後更に、新たなノルムの作成のためにデータを蓄積をする事が重要であると考えられる。このため、トレーニングルームへの積極的な来訪者のみならず、一般学生のデータ、さらに教職員等の高年齢者のデータ収集が継続的な課題として挙げられた。

3) 第3回 6月21日

(1) 石手 靖「ジャンプ力の持続性と筋の緩衝能力について」

ジャンプ力の持続性の検証において、これまでは、ジャンプの高さ、いわゆる最高到達点の低下に注目してきたが、今回は、筋の緩衝能力に着眼して、運動生理学的要素を理解し、その開発に役立てる。内容は、先ず久野らの先行研究を参考文献として紹介し、筋の緩衝能力を説明する。つまり、強度の運動時における筋中乳酸の蓄積の低減と蓄積された乳酸の代謝による除去能力を理解する。次いで、筋の緩衝能力がトレーニングによって開発されること、また、トップレベルのバレーボール選手は、その能力が極めて高い事例をあげ、強度のジャンプを繰り返すバレーボールの要素と筋の緩衝能力との間の強い関連を示した。

したがって、筋の ph の測定がバレーボールに必要なジャンプ運動の開発の手掛かりとなるのではないかと考えられ、一回の高さを増大させるとともに、筋の緩衝能力を向上させることが持続性の向上につながり、バレーボールの競技力に影響するのではないかと考えられた。

(2) 近藤明彦「Applying the timely simulator system for the purpose of checking ground stroke in tennis」

テニスのグラウンド・ストロークの技能向上を目指し、テニスボール飛来の時間的情報を音で、またそのコースと相手プレーヤーのストロークの様相を光刺激で提示することができる Time Simulator System を用い、オンコートでのトレーニング実験を行った。

大学生女子テニス選手を非験者として、プロ・トーナメント・プレーヤーの打球速度に設定された条件下で、1. Pre-test 2. 内省報告 3. 練習セッション 4. 内省報告 5. Post-Test 6. 内省報告の手順で実験は行われた。非験者のグラウンドストロークの様相は、ビデオカメラで撮影され、動作パターンの変化についての定性的な分析と、ストローク開始からインパクトに至るまでの時間に関する定量的分析が行われた。

各被験者とも、Pre-Test に見られたヒッティングのタイミングの遅れに関するミスが、練習セッション後の Post-Test においては減少するというパフォーマンス向上がみられた。これは、時間分析の結果からは、ラケットのテイクバック開始から終了までの時間的短縮に現れていた。また、動作分析からは、コートセンター付近からボールヒッティング位置に移動する際の、初期の移動距離の増加という結果に現れていた。内省の結果からも同様の報告があり、Time Simulator System を用いた練習効果と認められた。

4) 第4回 7月19日(金)

(1) 吉田泰将「剣道における素振りの指導法について」

過去の剣道指導書および専門書における素振りに関する記述より、素振りのタイプの分類を試みた。まず、振りかぶり方による分類では、竹刀が水平面に対して45度となるまで上げるもの・竹刀が床面と平行(水平)となるまで上げるもの・竹刀の先端が斜め下(床面に対して45度)を向くまで上げるもの・竹刀が背骨及び臀部につくようにするものの4タイプとなった。また、空間で剣先を止める位置による分類では、右腕が肩の高さとなるようにするもの・左拳が鳩尾の高さになるようにするもの(剣先が自分の頭の高さ)の2タイプに大別できた。さらに、打撃時の腕の伸ばし方による分類では、意識的にまっすぐに伸ばす・自然と剣先が遠い位置になるように意識し必ずしも伸び切らないものの2タイプが挙げられた。

これらの分類を基に、理想の素振りフォームを追求するために今後研究を進める計画である。測定項目としては、剣先の軌跡・左右拳の軌跡・剣先のスピード等の三次元解析、主動筋の特定のために三角筋・大円筋・僧帽筋・広背筋についての筋電図分析、左右握りの締めと脱力についてストレンゲージなどによる分析を幅広い被験者を対象に試みたいと考える。

参考までに現在筆者が指導する際のチェックポイントとしているのは、中段の構えを正しくつくる。これは肩と両腕で形作られる五角形(野球のホームベース型)を左右対称形で作るものである。握り方についても柄に対して指が斜めになる。振りかぶり方は、中段の構えでつくったホームベース型を肩の線でひっくり返し、その時左拳がなるべく高い位置となるよう心がける。さらに剣先は後方の壁を突き刺すイメージの位置に置く。振りおろし空間で止める位置については、剣先を自分の頭の高さで一番遠いところ、同時に左拳が一気に鳩尾の高さで遠い位置に、竹刀・腕全体を自然に前方へ放り投げる。そうする

ことにより左右の腕が自然と伸びかつ、実際には幾分曲がってゆとりあるものとなる。

このように経験的にイメージしている指導法が理論的に実証できるよう今後努力していきたい。

(2) 植田史生「新陰流における『沈なる身』から『自然体』への移行について」

新陰流創始者、上泉信綱は幼少より兵法・剣術に志し、陰流の中から奇妙を抽出し新陰流と号したことを「影目録」に明言している。創始年代は1540年代と思われる。新陰流の特色は戦場における甲冑武者剣術（介者剣術）の低く身を沈めて太刀の構えに頼る刀法・理合を改め、兵法の術・理を革新した。柳生宗厳は1565年4月、道統二世を継承した。宗厳は研鑽を深め「無刀の位」を開悟した。また、宗厳の兵法の工夫・極意は「新陰流截相口伝書事」「没じ味手段口伝書」となり、1605年6月に嫡孫柳生兵介長厳（後の兵庫助利厳）に相伝された。利厳は流祖、二世の教えを「昔」の教えとして、昔の古い教えを改革して真に新しい時代に即した兵法（直立たる身の兵法）を具現した。1620年に「始終不捨書」を著し現在に相伝している。

参考文献 資料柳生新陰流 今村嘉雄著
柳生新陰流道眼 柳生延春著

5) 第5回 10月4日（金）

(1) 村山光義「生体表面からの筋の硬さ評価について」

生体表面からの筋の硬度測定においては、上層である皮膚・皮下組織成分をどう取り扱うかが、問題となる。汎用性のある筋硬度測定機器の開発のため、これまでの基礎研究の成果について報告することとした。

筋の硬度測定は、生体表面から組織の変調を客観的に知る目的で行われ、皮膚上からの触診（しこり・浮腫、張り・凝り）マッサージや肩こりなどの指標化を目指すものが多い。筋の生理的変化からみると、組織の循環変化（運動による一過性の血流変化）筋肉痛による変化（関節角度変化・筋線維角度、浮腫、滞留）筋肥大・筋力（筋収縮時の変化）等によって変動することが認められている。

しかしながら、筋の硬度評価においては、皮下組織成分も複合され、測定値の意味づけは容易ではない。測定法には、力（荷重）-変位関係の評価として押圧法が代表的で、この方法で皮下組織と筋の2層評価が可能（Horikawa et al: 1993）との報告がある。そこで、先行研究では測定されていない、大腿部の筋の硬さ評価を HORIKAWA ET AL: に準じて行った。測定の結果、筋厚の大きな大腿部では、筋成分が直線的にならず、全体に2次曲線を示した。皮下組織厚の変位で成分を分離したところ、2次曲線の係数と測定部位の筋断面積また、荷重 1500 gf での変位量と筋厚とに有意な相関関係が得られた。このことは、少なくとも、皮下組織厚に近い数ミリの変位量では十分に筋を反映した成分は検出できないことを示唆するものであった。また、測定に用いた、機械刺激装置（DIA MEDICAL SYSTEM: DPS 270）は、押圧時の速度を変化させられる特徴があり、反力と押圧速度の関係から、粘弾性体の粘性成分を加味できる可能性も示された。

討論においては、以上のような測定方法の基礎部分を押さえ、より実践的な現場への応用の必要性が次の課題として指摘された。

(2) 野口和行「集中授業アウトドアレクリエーションにおける学生による授業評価」

本発表では、1996年7月24日から27日にかけて実施されたシーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」履修者45名を対象に、学生による授業評価を実施し、授業の目的、方法、成果等を検討することにより、授業のフィードバック情報を得て、今後の授業の充実に関する基礎資料を得ることを目的とした。

その結果、以下のことが明らかになった。

1. 授業の総合評価では、「非常に良かった」が81.8%を占め、「良かった」の18.2%を合わせると肯定的評価が100%となり、高い割合を示した。総合評価の5段階評価について、「非常に良かった」(5点)から「非常に悪かった」(1点)を与えたところ平均値は4.82であった。
2. 授業評価において肯定的評価の高かった項目として、「各種選択プログラムは良かった」、「学生スタッフは良かった」、「教員は十分に準備し熱意を持っていた」等があった。一方相対的に肯定的評価が低く、改善を要すると考えられる項目として、「理論と実技を関連づけて学習できた」、「事前のオリエンテーションは良かった」、「授業を理解するための補助手段は適切に用いられていた」等があった。
3. 自由記述において良かった点として、「選択プログラムが良かった」、「自分がやりたいと思うことを自由にできた」等の授業の内容・方法に関する記述が多くみられた。一方、悪かった点として、「時間的な余裕のなさ」、「日程が短い」等の日程に関する記述が多くみられた。

なお、質問項目について因子分析を試みたが、意味ある分類ができなかった。その点について、質問紙の項目の精選、目的・方法・成果を絞って今後フィードバックすべきである等の意見を頂いた。

6) 第6回 10月25日

(1) 清水直臣「カラー柔道着問題」

現在柔道界においてカラー柔道着を巡る議論が活発となっている。実際ヨーロッパにおいてはカラー柔道着を着用しての大会も開かれている。そこで、スライドでカラー柔道着を紹介しながらカラー柔道着を巡る問題について以下の3点を考察する。

1. オリンピック柔道種目の危機感
2. 柔道着のカラー化による特色
3. カラー柔道着の試験的導入

(2) 山内賢「バスケットボールのフリースローのメカニズム——開・閉眼の方法でフリースローを行った場合の3次元動作分析(その1)——」

バスケットボールにおけるフリースローは、この競技において唯一プレイヤー同士が対峙の関係にない環境の中でシュートが打てる特別なケースである。相手に邪魔されない環境の中でのシュートは、得点になって当然のように思われるが、必ずしもそうではない。プレイヤーが放つボールの高さとそのボールの初速度と投射角が常に等しければ、そのボールの描く放物線は、常に一定となる。そして、フリースローを打つ位置とゴールまでの距離とゴールの地上からの高さは一定であるので、ボールをある放物線の上にのせれば、シュー

トは常にゴールインするという理論が成立する。人間の行動は、自己が認識した意識の中で行われるはずである。フリースローを行うにあたって、スローの試行者から視覚を奪ってしまったとき、開眼で行うスローと比べてそのスローはどのような動作的な違いがでてくるのであろうか。もし、あるプレイヤーの開眼と閉眼のフリースローが動作的に類似していて、同じフォームでフリースローが行えるプレイヤーがいたとしたならば、そのプレイヤーは、フリースローの動作に確固たるイメージが身につけているのではないかと考えた。そして、そのようなプレイヤーは事実存在し、そのプレイヤーのシュート成功率は確かに高かった。発表者は、より再現性の高いフリースローの技術の獲得をプレイヤーに求めるべく、フリースローの練習課題の中に、閉眼スローを取り入れることを提案したい。尚、この内容は、日本スポーツ方法学会第7回大会で発表した。

7) 第7回 11月29日

(1) 松田雅之「近代オリンピックの変遷」

近代オリンピックを再興したフランスのピエール・ド・クーベルタン男爵が、1890年代にその理念を打ち出して以来、オリンピックが果たしてきた役割と理念の堅持は、他のどんな国際運動にも見られないものである。

近代オリンピックは、1896年にアテネで第一回大会が開かれてから、今年の第26回アトランタオリンピックは、100年目という記念すべき大会となった。初めはクーベルタンが青少年の健全な育成や世界平和を唱えて始まった近代オリンピック大会は、参加12ヶ国、出場選手200名足らずの、親しい者たちだけの小さな運動会から、今や参加国197、出場選手10,000人を越える、全世界がテレビで見守る巨大なスポーツの祭典へと発展してきた。しかしこの間、政治的策謀、商業的圧迫、とうとうたる技術革新や経済変動、最近ではアマチュアリズムの崩壊やドーピングなど、オリンピックは様々な問題に直面してきた。

今回の研究会では、オリンピック運動の目的、理念などを踏まえ、100年を迎えたオリンピックの変遷を、その時代ごとの名選手、名場面などを紹介しながら、現在オリンピックが抱えているあらゆる問題などについて報告した。

(2) 綿田博人「メジャーリーグのスプリングキャンプを視察して」

期間：2月15日～3月5日

場所：アリゾナ州及びフロリダ州

バッテリーは2月15日前後、野手は2月20日前後にキャンプインするのが通例である。キャンプのメニューは、フォーメーションプレーの確認、サインプレーの確認などで、日本のキャンプのように体力づくりからスタートはしない。体力づくりは各自オフシーズンに任せ、より実践に近づいたトレーニング期間である。2月末から約1ヶ月間30ゲームを行い、選手の人数を徐々に絞っていくのである。全体の人数は約60名程度でそのうち15、6名は招待選手と呼ばれ、メジャーと3Aのボーダーラインの選手である。最終登録人数は約30名である。キャンプの主眼はあくまでもプレーの向上を目指すことであり、体力づくりではない。一言で言い換えれば実践のためのトレーニング期間であるといえるのではないかと思う。

(3) 今榮貞吉「BMI と% FAT、LBM の関係の検討」

BMI (Body Mass Index) は「肥満」と「やせ」判定の簡便な方法として世界的に広く用いられている。

この BMI が% FAT、LBM をどの程度反映しているのか、どのような関係にあるのかを検討するために、健康な男子大学生83名の身長、体重、% FAT、LBM の測定を行い、

1. BMI の区分別、判定区分別における% FAT
2. BMI の区分別、判定区分別における LBM

等を中心に分析し、検討を行った。

今回、対象とした年齢層 (18歳~21歳) においては、BMI の増加に伴って、% FAT、LBM 共に増加していく傾向にある。しかし、LBM の増加率が減少傾向を示し、% FAT の増加率が増大傾向を示すクリティカルポイントが BMI 25-26のあたりにあることが推察された。

今後、被験者数を増やしてさらに検討を加えていきたい。

8) 第8回 12月20日

(1) 山内賢「確率論を利用したゲーム分析」

未来のゲームの勝敗を予言することは難しい。しかし、チームは、何とか試みたいと考える。確率論を利用して未来の出来事を予測することは、その結果を知り、同時に改善の方法を導き出すことでもできる。「ゲームの理論」の Min-Max 定理も最悪の事態を防ぐにはどのようにしたらよいかを発見するために考えられた経済学の中の確率論である。発表者は、これまで様々な数量化の理論 (主に確率論) をスポーツの現場へ応用する事を試みてきた。そして今回の発表では、マルコフ過程と呼ばれる確率連鎖をスポーツの世界へ応用した例を紹介することにした。

A、B、Cの3チームが存在すると仮定する。さて、これからAチームはBチームとゲームを行うことになった。過去に、AチームはCチームとゲームを行っていて、BチームもCチームとゲームをすでに行っていたとする。AチームとBチームが共通に対戦したCチームとのゲームにおけるシュート成功率、ディバウンド獲得率、パス成功率、自チームがおかした様々なミスの確率などのデータは、確率論のマルコフ過程を利用するとAチームとBチームにおける仮想ゲームを計算することができる。あるチームが複数のゲームを行う時、それぞれのゲームにおける内容は必ずしも先に述べた確率のによって決定づけられる訳ではなく、他の心理的要因や突発性のエラー (自然界の気まぐれ) もその要因として付加的に考えなければならない。しかし、次にせまるゲームの勝敗を予測した結果、そこで発見されるネガティブなミスの要因を練習することによって改善することは、たとえ仮想ゲームで負ける結果がでていたとしても、その損失を最小限に食い止めることができるし、うまくいけば仮想試合の結果を覆すことができるかもしれない。

(2) 篠原しげ子「ボールルームダンスのモダン種目の体の使い方の特徴」

ボールルームダンスを美しく踊るためには、基本姿勢を正しく保つ必要がある。そのためには、①まっすぐに立つ、②正しいホールドを保つ、ことが必要である。ダンスの履修学生に正しい姿勢を保持するためにどの筋肉が、どのように使われているのか、知っても

らうために、ビデオ、筋電図などを用いて検討したい。更に初心者と経験者（中級、上級）との差異、他のダンス種目との違いなどについても検討する予定である。目下、測定器の購入交渉中のため、姿勢、動きの特徴をビデオと口頭で説明し、採取予定の筋肉の部位を説明した。

9) 第9回 1月24日(金)

(1) 佐々木玲子「子どもの打叩動作テンポ調整の発達特性（*研究会当日出席不可能であったため、事前のポスター掲示による発表形態をとった）」

ヒトの動きの中には歩行をはじめとして、ある一定の速さをもって反復して行われるものは多くみられる。その周期性が加齢とともに変化していくことや、周期の恒常性が加齢に伴い増していくことなどがこれまでも報告されている。子どもの遊び・運動の中にもリズムカルなくり返しのある動きは多く含まれ、その中でも歌遊び、手遊びのように、ある一定のテンポに速さをあわせた動きを行うことも多い。動作をしやすい至適なテンポがあるなら、そのように他の何ものかに動きを合わせるという場合には、自己の至適な速さに抗して、合わせるべき対象の速さに応じた動作をしなければならないことになる。規定された速さに対してどれだけ自己の速さを制御できるか、その範囲が広いほど調節の能力は高いことになろう。

本研究では、規定されたテンポに自己の動作速度をあわせて行うという課題に対する応答から、子ども（3歳～12歳）の動作テンポについての発達の特性を明らかにすることを目的とした。課題は、片手のタッピングで、一定テンポの反復音刺激に同期させることと、それに引き続いて同じテンポを維持してタッピングを続けるというものであった。結果を以下に示す。

課題とされたテンポ（370 msec～1300 msec 内の一定間隔）に対する同期相における「刺激—打叩」同期、および継続相における打叩間隔からみると、タッピング動作として遂行しやすいと思われる至適なテンポは500～600 msecであることが推察された。その間隔を基準にすると、それより速い課題テンポに対しては打叩間隔はより遅く、それより遅い課題テンポに対してはより速くなるという傾向が年少児においてより強くみられ、先行研究と同様の結果を得た。また、遅いとテンポでの打叩間隔の恒常性も低かった。継続相における動作の遂行には、課題テンポより自己の至適テンポが優位であると考えられる。発達の的にみると、5歳～7歳頃に、時間的な動作の調整能に関する変換点があることが推察された。

(2) 高嶺隆二「着衣が泳ぐスピードに及ぼす影響について」

衣服を着たままで水中に落ちたとき、衣服の抵抗が泳ぐ動作にどのような影響を及ぼすかを知ることは、水難事故に遭遇した場合に己の身を守るための咄嗟の判断に重要な意味を持つ。

体育実技「水泳」履修者（82名）に対して、①長袖のトレーナー、ジーンズの長スボン、運動靴を身につけた状態と②一般的な水着の状態それぞれクロール、平泳ぎの二通りの泳法で25mの全力泳でのタイムを測定し、そのスピードの比較をすることによって着衣の状態で安全のためのより良い水中動作を知る材料の提供を試みた。

距離25mの平均タイムは、クロールでは、水着 17.0秒、着衣 34.4秒、平泳ぎでは、水着 23.6秒、着衣 33.9秒であった。水着でのタイムはクロールが6.4秒速かったが、着衣では平泳ぎの方が0.5秒速い結果が出た。

試技終了後のアンケートの回答では、「楽に泳げたか」の問いに対して、クロール2名、平泳ぎ24名が肯定、「25m泳げなかった」と答えた者はクロール15名、平泳ぎ3名であった。また「服を着たまま泳ぐとしたら何泳ぎをするか」に対してクロールと答えた者3名、平泳ぎと答えた者75名、その他4名であった。長袖のトレーナーはクロールで泳ぐとき腕を水上に出す動作がことさら難しく、さらに靴のままのキックが推進の妨げとなるが、平泳ぎでは、腕は水中での動作であり、キックは足の裏で水を捕らえる動作が自然に行える利点があることによって、前述の結果を示したと言える。

3. 体育研究所プロジェクト研究について

大テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」

現代は来たるべき長寿社会に向けて諸問題を抱えている。その中で、スポーツ・健康分野の役割は重要であり、体育研究所の目的と義塾での位置づけを考えた時、今後の研究活動は、その成果が塾内、ひいては世界規模で、教育・スポーツ振興活動に直結すべきと考えられる。そして、そのためには一層の研究活動の活性化が必要である。

そこで、平成8年7月、こうした研究活動推進を目指し、これまでの個人研究に加え、研究所全体の研究テーマを設定し、共同研究を展開するプロジェクトを組織した。このプロジェクトの計画にあたっては、研究所の代表研究として所員全員が携わり継続的に実施する共同研究であるとの認識がされ、慶應義塾の今後を指向した大テーマの設定が所内の研究委員会を中心に行なわれた。テーマは「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」であり、プロジェクトは、以下の三つのグループの視点から多角的にアプローチすることになった。

第1グループ 「今後のスポーツ・健康教育の役割 人文・社会的アプローチ」

第2グループ 「自然科学的立場から見た健康問題」

第3グループ 「スポーツ・健康教育の実践的研究」

以上の小テーマをにそって、更に数テーマを手初めとして掲げ、分担することになった。第1グループは近藤君・綿田君、第2グループは今柴君・篠原君、第3グループは植田君・松田君を中心に活動している。以下に各グループの詳細と年度内の進行状況についてまとめた。平成8年度は、準備段階の部分も多かったが、次年度以降へ成果をあげるべく活動中である。

第1グループ 「今後のスポーツ・健康教育の役割 人文・社会的アプローチ」

第1グループは、歴史研究および調査研究という2つの研究班を設け、それぞれテーマにしたがって研究が推進された。

歴史研究（綿田班）：慶應義塾のスポーツは、体育・スポーツ界において先駆的役割を担ってきたところは大きい。本研究班の目的は、慶應義塾の体育・スポーツ教育をどのように捉え位置づけてきたか、現在の基盤となっている体育・スポーツ教育の思想の根源を歴史的に検証しようとするものである。さらに、今後21世紀に向けての慶應義塾におけるスポーツ・健康教育を考える礎としたいと考える。平成8年度は、慶應義塾の大学体育・スポーツ界における位置づけとその担ってきた役割を明らかにするため、関連文献、資料の収集を行い、歴史的経緯、全体像を捉えた。（平成9年度一部報告予定）

調査研究（近藤班）：慶應義塾においてスポーツ・健康教育を展開していく上で受け入れ側である塾生の実態を把握することは重要である。これまでに体育実技の履修者を対象とした運動活動の調査から一部実態と傾向は把握されている（平成7、8年度体育研究所紀要）。しかし、今後、より積極的な展開をしていくためには、授業履修者だけにとどまらず、広く塾生全般の実態を捉えていく必要があると考え、塾生のスポーツ活動に関する動向調査を行うこととした。平成8年度は、調査にあたっての準備として、調査対象の選定、調査項目の検討、および作成作業を遂行した。平成9年度、調査を実施する。

第2グループ 「自然科学的立場から見た健康問題」

第2グループは、健康にまつわる諸問題へのアプローチとして、まず、塾生や教職員の健康把握のための一助となる体力評価をテーマとした。具体的には、体育研究所において簡便に実施可能で、ベーシックな体力評価テストとして、HRPF (Health Related Physical Fitness) テストを確立し、幅広い年代層を対象に独自のノルムを作成することである。HRPF テストは、健康に関連した体力要素の評価テストで、身体組成、筋持久力、柔軟性、全身持久力、瞬発力(筋力)を測定するものとして、平成7年度から、検討を重ね、塾生の実態調査について平成8年度報告した。次年度以降、若年層から高齢者の各年代別のノルムを作成する。また、調査用紙を併用し、健康度やストレス度といった精神面へもアプローチし、多角的で独自の健康評価システムの構築を目指している。

第3グループ 「スポーツ・健康教育の実践的研究」

第3グループは、スポーツ・健康教育の実践研究として特に、塾内における、塾生、体育会、教職員等を対象とした、指導・コーチ、教科教育などの場面に直接関与する課題をテーマとした。大きく授業研究、競技力向上の2つにまとめられるが、以下に示す5つの小テーマが掲げられスタートした。

教科教育における実践研究課題として、「スポーツ教育のケーススタディ」、「動作解析の教育的フィードバックシステム開発」の2つが計画された。その内平成8年度は、前者について、新種目としてカリキュラムに取り入れられているシーズンスポーツ・アウトドアレクリエーションの授業を対象に、質問紙法によって授業評価を実施し総合評価に寄与する要因を明らかにした。これについては、授業担当の5名の共同研究として日本スポーツ教育学会にて発表し、研究所紀要に報告した。また、動作解析のシステムについては、分析のための簡易システムを完成することができ、教育的フィードバックについてその内容を検討中である。

競技力向上に関する研究テーマに関して、塾体育会の成績・競技力向上を目指し、次世代的な観点から各課題にアプローチすることを考えた。具体的には、「スポーツ場面の心理的アプローチ」「競技力向上のためのスポーツ教育」「体育会部員対象の体力測定」の3つである。「心理的アプローチ」については、現場に密着した研究色を出し、トレーニングの効果、試合での実力発揮に寄与することを目的に、徳永(1994)によって標準化された〈心理的競技能力〉の診断テストを用い、各選手へこのフィードバックを行なう計画が立案された。平成9年度実施に向け、市販されているテストの購入予算が確保された。「スポーツ教育の研究」については、体育会を対象に競技力向上のための基礎的資料の収集として、各種大会の戦績、戦力分析(個人ヒストリー)、トレーニング内容、練習内容、生活習慣などについて調査を実施する計画である。さらに、各部との連携を強化するために、体育研究所スタッフと各部指導スタッフ、学生幹部とのミーティングから今後の課題についても検討する予定である。「体力測定」については、従来、組織的な受け入れがなされていなかったこともあり、アスリート向けの測定項目に関する検討を加えている。平成8年度は、そのために、予備調査として、サッカー部、バレーボール部等の協力を得て、データを収集した。来年度は、対象を広げ、報告をする予定である。

第2部 教育分野

概 要

体育研究所の設置する保健体育科目は、文学部、経済学部、法学部、商学部、医学部、理工学部を対象とする講義科目である体育理論（スポーツサイエンス）・保健衛生（ヘルスサイエンス）、並びに実技科目の体育実技Ⅰ（ウィークリースポーツクラス）・体育実技Ⅱ（シーズンスポーツクラス）である。さらに通信教育部の夏期スクーリング等における体育理論と体育実技である。これらの、講義テーマ、実技種目、履修者数などの資料について第1節に示した。

平成8年度は、理工学部において、体育実技が他学部と同様に選択科目へ移行した。この結果、大学設置基準の大綱化によるカリキュラム改訂によって、保健体育科目は各学部間に履修可能な単位数の差はあるが、全学部とも必修科目から選択科目・自由科目へと移行された。こうしたカリキュラム改訂を発端にして、体育研究所では、新しい大学体育の在り方について検討を続けている。こうした活動の一つとして平成4年度以降、毎年、学生による授業評価、学生の体育スポーツの指向、ニーズ等について、アンケート調査を実施してきている。その詳細について第2節に示した。

また、本年度はカリキュラム改訂後4年目をむかえ、特にシーズンスポーツの充実について重点的に検討を重ねた。その経過、シーズンスポーツ懇談会、冬季種目視察の記録とともに、今後の保健体育科目の課題について第3節にまとめた。

1. 平成8年度カリキュラム概要と履修統計

1) 各学部対象の保健体育科目

平成8年度は、各学部対象として、ウィークリースポーツ（体育実技Ⅰ）において24種目延べ296コマ、シーズンスポーツクラス（体育実技Ⅱ）において40種目・40コマ、合計64種目延べ336コマを開講した。表1-1に担当者と種目、表1-2、表1-3に定員と履修者数などを示した。また、講義科目についてはスポーツサイエンス（体育理論）11テーマ・11コマ、ヘルスサイエンス（保健衛生）7テーマ延べ16コマを開講した。（表1-4参照）

カリキュラム改訂後、履修対象学生が1年生のみから1～4年生へ拡大し、開講種目の多様化と増設、三田での実技開講などの対応がなされてきた。4年目の節目となる本年度は、実技において延べ8,924名、講義では527名の履修登録があった。なお、表には示していないが、実技履修者の実数は4,624名（1年生2,641名、2年生1,548名、3年生294名、4年生141名）であり、平成7年度の4,594名から増加の傾向を示した。また、学年別の実数を比較すると、3、4年生の履修者が倍増しており、全学年的な広がりもみられる。以上のように、選択科目への移行がなされた後も、年間履修者は実数で4,500名を越え、必修時に劣らぬ規模で実技を展開している現状である。

講義科目については、画一的な「体育理論・保健衛生」という名称だけでなく、中心となる講義内容について具体的なサブテーマを挙げて開講している。曜日時限、テーマによって履修者にばらつきはあるものの、履修者総数は前年度の539名とほぼ同数であった。今後、さらなる内容の充実とサブテーマの精選を試みるべく検討を進める方針である。

表1-1. 体育実技担当者および担当種目

(1) 平成8年度体育実技Ⅰ担当表

体育研究所専任教員			
氏名		担当種目	
教授	橋本 治雄	ゴルフ	
	今栄 貞吉	体力UPコース	
	高嶺 隆二	水泳、体力UPコース	
	近藤 明彦	陸上競技、ジョギング、テニス、テニス(三田)	
助教授	安藤 勝英	柔道、柔道(三田)	
	篠原しげ子	ダンス、ダンス(三田)	
	植田 史生	剣道、ソフトボール、卓球	
	綿田 博人	野球、ソフトボール	
	松田 雅之	陸上競技、ジョギング、体力UPコース、卓球、ニュースポーツ	
専任講師	清水 直臣	ゴルフ	
	佐々木玲子	エアロビクス、ダンス(三田)、バスケットボール	
	石手 靖	バレーボール、バレーボール(三田)	
	山内 賢	ハンドボール、バスケットボール、ニュースポーツ、体力UPコース	
	吉田 泰将	剣道、剣道(三田)、ソフトボール、体力UPコース	
	加藤 大仁	留学中	
助手	村山 光義	バレーボール、テニス	
	野口 和行	ハンドボール、バレーボール、ニュースポーツ	
	上向 貫志	サッカー	
	田中 伸明	テニス、テニス(三田)	
非常勤講師			
氏名	担当種目	氏名	担当種目
青樹 茂彰	ホッケー	須田 芳正	サッカー
稲田 周平	合気道、合気道(三田)	内藤 尚男	ソフトテニス
魚住剛一郎	バスケットボール	早川 靖彦	ラクロス
勝又 宏	ソフトボール、野球	平井 克英	バドミントン
加藤 幸司	バドミントン	堀場 雅彦	テニス、テニス(三田)
木塚 孝幸	バスケットボール	松本 潔	卓球
日馬 雄紀	バスケットボール	村上 博之	弓術(三田)
佐々木道子	バドミントン	湯田 秀行	サッカー
鈴木 智子	エアロビクス		

(2) 平成8年度体育実技Ⅱ担当表

実技指導員 *は体育研究所専任教員	
種目名	氏名
アウトドアレクリエーション	吉田 泰将*
アメリカンフットボール	高木 晴彦
サッカー	小森 秀二
ソフトボール	綿田 博人*
バスケットボール	吉川 政宏
バドミントン	吉田 格磨
バレーボール	竹内 正和
フェンシング	佐藤 秀明
ボクシング	砂押 雅夫
ヨット	斎藤 渉
ラグビー	小野寺 孝
弓術	吉岡 實
空手	蓮池敬一郎
剣道	清水 誠治
硬式野球	後藤 寿彦
自動車	前島 徹也
柔道	安藤 勝英*
重量挙げ	関司 翔一
少林寺拳法	中島 正樹
水泳	伊藤 基孝
卓球	近光 護
軟式野球	丸井徳三朗
馬術	横山 武次
陸上競技	松田 雅之*
ゴルフ	村山 雅春
ダンス	篠原しげ子*
ソフトテニス	桑野 正位
テニス	堀場 雅彦
ハンドボール	上原 雅敏
ホッケー	青樹 茂彰
レスリング	伊藤 勉
器械体操・新体操	宮崎 正己
合気道	岡部 英紀
山岳	岩永 治朗
相撲	桃澤 庸介
端艇	高橋 一栄
洋弓	畠山雅一朗
スキー	吉田 久男
スケート	福水 田夫

表1-2. 平成8年度体育実技I（ウィークリースポーツクラス）履修者統計

種 目 名	コ マ 数			総定員	履修者	充足率	登録調整 平均倍率
	春 学期	秋 学期	年間 合計				
日吉地区							
ソフトテニス	1	1	2	60	36	60.0	0.43
ホ ッ ケ ー	1	1	2	80	53	66.3	0.63
合 気 道	1	1	2	80	67	83.8	0.78
ジ ョ ギ ン グ	2	2	4	120	90	75.0	0.56
ラ ク ロ ス	2	2	4	360	129	35.8	0.29
ハンドボール	3	3	6	240	93	38.8	0.28
陸 上 競 技	3	3	6	180	73	40.6	0.53
柔 道	3	3	6	180	115	63.9	0.58
水 泳	6	1	7	210	185	88.1	0.91
エアロビクス	5	5	10	250	235	94.0	1.06
剣 道	4	4	8	240	88	36.7	0.33
ダ ン ス	4	4	8	160	163	101.9	1.18
ニュースポーツ	5	5	10	340	198	58.2	0.40
卓 球	6	6	12	340	316	92.9	1.10
野 球	5	5	10	240	179	74.6	0.71
体力UPコース	8	10	18	420	400	95.2	1.10
バドミントン	8	8	16	520	462	88.8	0.84
ゴ ル フ	9	8	17	365	365	100.0	1.16
ソフトボール	9	11	20	704	653	92.8	1.28
テ ニ ス	11	11	22	512	502	98.0	1.63
サ ッ カ ー	12	12	24	920	787	85.5	0.89
バレーボール	12	12	24	800	638	79.8	1.18
バスケットボール	14	14	28	850	814	95.8	1.52
日吉地区合計・平均	134	132	266	8171	6641	75.9	0.84
三田地区							
テ ニ ス	4	4	8	116	109	94.0	1.66
ダ ン ス	2	2	4	100	112	112.0	1.28
合 気 道	1	1	2	30	25	83.3	0.83
柔 道	2	2	4	120	30	25.0	0.24
剣 道	2	2	4	120	21	17.5	0.38
バレーボール	2	2	4	100	90	90.0	0.97
弓 術	2	2	4	80	74	92.5	1.04
三田地区合計・平均	15	15	30	666	461	73.5	0.91
ウィークリースポーツ合計	149	147	296	8837	7102	75.4	1.00

表1-3. 平成8年度体育実技Ⅱ（シーズンスポーツクラス）履修者統計

種 目 名	コ マ 数		総定員	履修者	充足率	登録調整 平均倍率
	時 期	年間 合計				
アウトドアレクリエーション	7月	1	50	54	108.0	4.18
アメリカンフットボール	7月	1	30	23	76.7	0.73
サ ッ カ ー	7月	1	50	56	112.0	1.62
ソ フ ト ボ ー ル	7月	1	40	43	107.5	1.58
ダ ン ス	7月	1	30	34	113.3	1.57
バスケットボール	7月	1	75	82	109.3	1.35
バドミントン	7月	1	120	81	67.5	0.45
バレーボール	7月	1	100	83	83.0	0.71
フェンシング	7月	1	20	11	55.0	0.35
ボクシング	7月	1	30	33	110.0	1.30
ヨ ッ ト	7月	1	50	24	48.0	0.32
ラ グ ビ ー	7月	1	60	31	51.7	0.45
弓 術	7月	1	40	45	112.5	1.80
空 手	7月	1	40	37	92.5	0.73
剣 道	7月	1	30	12	40.0	0.30
硬 式 野 球	7月	1	40	27	67.5	0.55
自 動 車	7月	1	70	77	110.0	1.36
柔 道	7月	1	30	11	36.7	0.30
重 量 拳	7月	1	16	9	56.3	0.63
少 林 寺 拳 法	7月	1	20	19	95.0	1.00
水 泳	7月	1	150	105	70.0	0.60
卓 球	7月	1	100	62	62.0	0.53
軟 式 野 球	7月	1	60	52	86.7	0.67
馬 術	7月	1	50	55	110.0	2.62
陸 上 競 技	7月	1	30	23	76.7	0.67
ゴ ル フ	9月	1	60	65	108.3	1.47
ソ フ ト テ ニ ス	9月	1	50	41	82.0	0.64
テ ニ ス	9月	1	80	89	111.3	1.14
ハ ン ド ボ ー ル	9月	1	40	31	77.5	0.70
ホ ッ ケ ー	9月	1	40	46	115.0	1.15
レ ス リ ン グ	9月	1	15	8	53.3	0.53
器 械 体 操	9月	1	20	21	105.0	1.05
合 気 道	9月	1	40	35	87.5	1.20
山 岳	9月	1	60	51	85.0	0.73
新 体 操	9月	1	20	16	80.0	0.70
相 撲	9月	1	5	7	140.0	1.20
端 艇	9月	1	50	24	48.0	0.36
洋 弓	9月	1	40	39	97.5	0.68
ス キ ー	2月	1	200	199	99.5	1.15
ス ケ ー ト	2月	1	200	65	32.5	0.26
シーズンスポーツ合計		40	2251	1826	84.5	0.98

表1-4. 講義科目テーマおよび担当者

体育理論 (スポーツサイエンス)

学期	曜日時限	講義テーマ	担当者教員	履修者数
春学期	月・4時限	スポーツにおけるメンタルマネジメント	近藤明彦・上向貫志・田中伸明	21
春学期	火・3時限	アウトドアレクリエーションへの招待	村山光義・野口和行	12
春学期	火・4時限	文化としてのスポーツ論	植田史生・綿田博人・松田雅之	4
春学期	木・2時限	アスリートのためのスポーツ医・科学	近藤明彦・佐々木玲子・大西洋平 (スポーツ医学研究センター)	30
春学期	金・2時限	スポーツと身体(からだ)の基礎理論	吉田泰将	34
秋学期	月・4時限	スポーツの社会学	近藤明彦・野口和行・上向貫志	11
秋学期	火・4時限	スポーツ上達の基礎知識	植田史生・石手 靖・村山光義	4
秋学期	水・2時限	健康と体力を考える	今柴貞吉・安藤勝英・山内 賢	7
秋学期	木・2時限	スポーツ心理学における俗説と真理	近藤明彦	21
秋学期	金・2時限	身体運動の科学	佐々木玲子	5
秋学期	金・3時限	スポーツと法	高嶺隆二	4
		合 計		132

保健衛生 (ヘルスサイエンス)

学期	曜日時限	講義テーマ	担当者教員	履修者数
春学期	月・3時限	遺伝、環境と現代病	南里清一郎(保健管理センター)	17
春学期	月・4時限	ライフスタイルと成人病	斉藤 郁夫(保健管理センター)	5
春学期	火・1時限	現代病の知識と予防	河邊 博史(保健管理センター)	20
春学期	水・1時限	医学からみたヘルスサイエンス	辻岡三南子(保健管理センター)	15
春学期	水・5時限	医学概論	橋本 治雄	99
春学期	木・4時限	親準備学	木村 慶子(保健管理センター)	53
春学期	木・5時限	医学概論	橋本 治雄	74
春学期	土・1時限	健康管理入門	吉田 正(保健管理センター)	25
秋学期	月・3時限	遺伝、環境と現代病	南里清一郎(保健管理センター)	9
秋学期	月・4時限	ライフスタイルと成人病	斉藤 郁夫(保健管理センター)	3
秋学期	火・1時限	現代病の知識と予防	河邊 博史(保健管理センター)	1
秋学期	水・1時限	医学からみたヘルスサイエンス	辻岡三南子(保健管理センター)	6
秋学期	水・5時限	医学概論	橋本 治雄	17
秋学期	木・4時限	親準備学	木村 慶子(保健管理センター)	20
秋学期	木・5時限	医学概論	橋本 治雄	19
秋学期	土・1時限	健康管理入門	吉田 正(保健管理センター)	12
		合 計		395

2) 通信教育部の保健体育科目

(1) 体育実技スクーリング

表1-5の通り体育研究所では15種目の授業を展開している。夏期スクーリング期間中の第Ⅱ期8月2日(金)～9日(金)の日曜日を除く7日間実施された。授業時間は13:45～16:00の酷暑の時間帯である。実施場所は日吉地区各体育施設を利用している。

学生の出席手続きは、健康診断書の提出・履修仮登録申し込みを行い、6月の仮登録許可・不許可の通知に従い、出席申し込みを行う。仮登録の申し込みは、第一希望から第三希望まで希望順位欄に記入でき、不許可者の減少を図っている。体育実技は2単位履修となっており、1単位履修はできない。特別課程入学者も同様である。(学士入学者は履修できない。)受講料納入後出席申し込みが完了する。その後、スクーリング受講票に選択し確定した種目が記載される。学生は希望種目を選択する事が出来、猛暑の時間帯にもかかわらず、積極的かつ意欲的に授業に取り組んでいる。

(2) 総合教育科目 保健体育科目 体育理論

体育理論は、他の教科と同じ様に、テキストの学習後レポートの提出・テスト受験により1単位が認定されるが、夏期スクーリング期間中の第Ⅱ期にそれぞれの講義を受講し、テストを受験することでも1単位が認定される。本年度は4名の教員によるオムニバス形式で講義が展開され、「スポーツと法」「慶應義塾のスポーツ」「スポーツとオリンピック」「健康と体力を考える」の多彩なテーマで学生の興味をそそる内容となった。

表1-5. 通信教育部関係保健体育科目担当表

平成8年度通信教育部夏期スクーリング体育科目
体育実技

種 目 名	担 当 教 員	総 定 員	履 修 者	充 足 率
ゴルフⅠ(初級)	清水 直臣	30	30	100.0
ゴルフⅡ(上級)	村山 雅春(非常勤講師)	30	30	100.0
キャリブセニックス	今栄 貞吉	20	20	100.0
ソフトボール	綿田 博人・田中 伸明	40	40	100.0
バスケットボール	山内 賢	75	74	98.7
バドミントン	加藤 幸司(非常勤講師)	30	30	100.0
バレーボール	石手 靖・上向 貫志	50	50	100.0
剣 道	植田 史生・吉田 泰将	30	13	43.3
柔 道	安藤 勝英	30	15	50.0
ダ ン ス	篠原しげ子	40	40	100.0
エアロビクス	佐々木玲子	60	60	100.0
水 泳	高嶺 隆二	100	80	80.0
卓 球	松田 雅之	30	30	100.0
陸 上 競 技	近藤 明彦	30	13	43.3
レジャースポーツ	村山 光義・野口 和行	80	71	88.8
通信教育部夏期スクーリング合計		675	596	86.9

総合教育科目 保健体育科目

体 育 理 論① テーマ	健康と体力を考える	担当教員	今栄 貞吉
	スポーツと法	担当教員	高嶺 隆二
	慶應義塾のスポーツ	担当教員	綿田 博人
	スポーツとオリンピック	担当教員	松田 雅之

2. 平成8年度スポーツクラス履修者アンケート集計結果

平成8年度は実技履修者へのアンケート調査として、春学期・秋学期のウィークリー、シーズンスポーツの3つについて、同一内容のものを実施し、それぞれ集計し、随時報告した。以下は、それら3つについてまとめ、再構成して示したものである。

尚、各表中の春Iは春学期ウィークリースポーツクラス、秋Iは秋学期ウィークリースポーツクラス、シーズンはシーズンスポーツクラスの各集計を示している。

1) アンケート回答者の基礎的データ

アンケートは授業評価について回答を得るため、各種目毎実施し、個人が複数回アンケートに回答したものが含まれる。そのため、回答回数をチェックし、実数回答数を出した。以下、授業評価項目以外については表2-1の実数が対象となっている。表2-2、表2-3、表2-4はそれぞれ、学部別のアンケート回答者数の総数、男女別、学年別の一覧である。学部間の比率は、ほぼ全履修者の比率と考えられ、ウィークリーとシーズンでは学部比率に違いが見られた。シーズンでは理工学部が特に比率が高く、ウィークリーでは平均して経済学部が多かった。また、学年別で、3、4年生には文学部が多いこともわかる。表2-5は昨年度以前の実技履修の有無について、「履修した」者の数を学部別に示した。全回答者の1/4が履修歴があり、2年生以上では半数程度であった。

表2-1 アンケート回答者数

	春I	秋I	シーズン	総和(延数)
総数	2269	1811	1018	5098
実数(集計対象)	1687	1368	619	3674
複数回答	176	242	305	723
回答回数未記入	406	201	94	701

表2-2 学部別アンケート回答者数 (総数)

実施時期	全体	文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工
春I (未記入 1)	1686	275 16.3%	365 21.6%	180 10.7%	189 11.2%	269 16.0%	4 0.2%	404 24.0%
秋I	1368	220 16.1%	291 21.3%	164 12.0%	207 15.1%	241 17.6%	2 0.1%	243 17.8%
シーズン	619	117 18.9%	86 13.9%	67 10.8%	53 8.6%	75 12.1%	1 0.2%	220 35.5%

表 2-3 学部別アンケート回答者数 (男女)

	性別	文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工	計	男女比
春 I	男子	136 11.7%	256 22.1%	114 9.8%	124 10.7%	188 16.2%	2 0.2%	340 29.3%	1160	62.2%
秋 I	男子	79 8.0%	236 24.0%	106 10.8%	149 15.2%	195 19.9%	2 0.2%	215 21.9%	982	71.8%
シーズン	男子	54 13.2%	58 14.2%	38 9.3%	30 7.3%	46 11.2%	1 0.2%	182 44.5%	409	66.1%
春 I	女子	117 26.7%	85 19.4%	57 13.0%	55 12.5%	69 15.7%	1 0.2%	55 12.5%	439	37.8%
秋 I	女子	141 36.5%	55 14.2%	58 15.0%	58 15.0%	46 11.9%	0 0.0%	28 7.3%	386	28.2%
シーズン	女子	55 30.4%	23 12.7%	24 13.3%	23 12.7%	24 13.3%	0 0.0%	32 17.7%	181	29.2%

表 2-4 学部別アンケート回答者数 (学年)

	学年	文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工	計	学年比
春 I	1	185 21.0%	155 17.6%	67 7.6%	81 9.2%	118 13.4%	3 0.3%	274 31.0%	883	65.0%
秋 I	1	183 22.0%	136 16.3%	73 8.8%	116 13.9%	127 15.3%	2 0.2%	195 23.4%	832	60.8%
シーズン	1	56 20.2%	19 6.9%	23 8.3%	15 5.4%	18 6.5%	0 0.0%	146 52.7%	277	58.8%
春 I	2	5 1.3%	122 30.7%	55 13.9%	56 14.1%	90 22.7%	1 0.3%	68 17.1%	397	29.2%
秋 I	2	14 3.1%	136 30.4%	75 16.8%	69 15.4%	107 23.9%	0 0.0%	46 10.3%	447	32.7%
シーズン	2	17 11.1%	34 22.2%	16 10.5%	17 11.1%	31 20.3%	0 0.0%	38 24.8%	153	32.5%
春 I	3	17 29.8%	16 28.1%	9 15.8%	6 10.5%	5 8.8%	0 0.0%	4 7.0%	57	4.2%
秋 I	3	16 34.0%	12 25.5%	7 14.9%	8 17.0%	3 6.4%	0 0.0%	1 2.1%	47	3.4%
シーズン	3	7 21.9%	12 37.5%	2 6.3%	5 15.6%	5 15.6%	0 0.0%	1 3.1%	32	6.8%
春 I	4	9 40.9%	0 0.0%	5 22.7%	7 31.8%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.5%	22	1.6%
秋 I	4	7 16.7%	7 16.7%	9 21.4%	14 33.3%	4 9.5%	0 0.0%	1 2.4%	42	3.1%
シーズン	4	3 33.3%	2 22.2%	0 0.0%	1 11.1%	3 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	9	1.9%

表 2-5 昨年度以前の体育実技履修者数

		文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工	計	比率
春 I	有	30 8.0%	105 28.0%	54 14.4%	32 8.5%	63 16.8%	1 0.3%	90 24.0%	375	22.2%
秋 I	有	33 8.9%	103 27.8%	63 17.0%	62 16.7%	61 16.4%	0 0.0%	49 13.2%	371	27.1%
シーズン	有	23 14.6%	31 19.6%	17 10.8%	19 12.0%	24 15.2%	0 0.0%	44 27.8%	158	25.5%
									100%	

2) 運動の実施状況について

学生の運動活動について、体育実技以外に日常的に運動をしているかを質問した。

表 2-6 は、実技以外での運動実施者数、表 2-7 はその実施形態と頻度を示している。運動実施者数は全体の約 6 割程度で、男子がやや多かった。また、実施の形態は、7 割がサークルであり、その頻度は週 1、2 回が多く、週 3 までで 8 割近くを占めた。また、この頻度に男女差はなかった。

表 2-6 体育実技以外での運動実施者数 (実数及び総回答者に占める割合)

春 I			秋 I			シーズン		
総数	男子	女子	総数	男子	女子	総数	男子	女子
1114	793	266	800	621	179	380	259	108
66.0%	68.4%	60.6%	58.5%	63.2%	46.4%	61.4%	63.3%	59.7%
学年	総数		学年	総数		学年	総数	
1	590	66.8%	1	492	59.1%	1	191	69.0%
2	255	64.2%	2	264	59.1%	2	84	54.9%
3	42	73.7%	3	28	59.6%	3	16	50.0%
4	9	40.9%	4	16	38.1%	4	3	33.3%

表2-7 運動実施形態及び実施頻度

	春 I		秋 I		シーズン	
サークル	885	79.7%	586	74.2%	272	71.8%
地域クラブ	35	22.6%	25	3.2%	19	5.0%
体育会	66	42.6%	63	8.0%	42	11.1%
その他	124	80.0%	116	14.7%	46	12.1%
計	1110		790		379	
実施頻度	春 I 全体		秋 I 全体		シーズン全体	
週7回	15	1.4%	7	0.9%	1	0.3%
週6回	48	4.3%	36	4.6%	22	5.8%
週5回	36	3.3%	30	3.8%	24	6.3%
週4回	69	6.2%	41	5.2%	23	6.1%
週3回	143	12.9%	102	12.9%	50	13.2%
週2回	340	30.7%	240	30.3%	102	27.0%
週1回	335	30.3%	228	28.8%	106	28.0%
月2回	73	6.6%	59	7.5%	28	7.4%
月1回	48	4.3%	48	6.1%	22	5.8%
計	1107		791		378	
実施頻度	春 I 男子		秋 I 男子		シーズン男子	
週7回	13	1.6%	5	0.8%	1	0.4%
週6回	32	4.1%	27	4.4%	17	6.6%
週5回	22	2.8%	20	3.3%	18	7.0%
週4回	49	6.2%	30	4.9%	16	6.2%
週3回	109	13.8%	90	14.7%	37	14.3%
週2回	248	31.4%	192	31.3%	70	27.1%
週1回	242	30.6%	172	28.1%	70	27.1%
月2回	44	5.6%	42	6.9%	15	5.8%
月1回	31	3.9%	35	5.7%	14	5.4%
計	790		613		258	
実施頻度	春 I 女子		秋 I 女子		シーズン女子	
週7回	2	0.8%	2	1.1%	0	0.0%
週6回	10	3.8%	9	5.1%	2	1.9%
週5回	9	3.4%	10	5.6%	6	5.6%
週4回	19	7.2%	11	6.2%	5	4.7%
週3回	25	9.5%	12	6.7%	12	11.2%
週2回	82	31.2%	48	27.0%	29	27.1%
週1回	79	30.0%	56	31.5%	33	30.8%
月2回	23	8.7%	17	9.6%	12	11.2%
月1回	14	5.3%	13	7.3%	8	7.5%
計	263		178		107	

3) 体育実技履修理由について

表2-8は体育実技を履修した理由について示している。複数回答可であるが、中心的な回答は、「授業で運動がしたかった」「技量・技術をアップしたい種目があった」の2つであり、ウィークリーでは前者が特に圧倒的多数であった(78%)。一方、シーズンでは、「授業で運動がしたかった」が5割に対し、「技量・技術をアップしたい種目があった」が約4割と均衡し、シーズンスポーツの技術指向が特徴として示された。また、女子では男子に比較して「教職過程に必要なだから」「友達と一緒に楽しみたい」の回答が多かった。

表2-8 体育実技を履修した理由 (複数回答可: 実数及び各集計群に対する割合)

質問項目	集計時期	総回答数	男子	女子	運動実施有り	運動実施なし
授業で運動がしたかった	春I	1304 77.3%	891 76.8%	348 79.3%	819 73.5%	484 84.5%
	秋I	1068 78.1%	765 77.9%	303 78.5%	579 72.4%	480 84.5%
	シーズン	305 49.3%	196 47.9%	94 51.9%	174 45.8%	130 55.6%
技量・技術をアップしたい種目があった	春I	566 33.6%	300 25.9%	100 22.8%	308 27.6%	113 19.7%
	秋I	359 26.2%	267 27.2%	92 23.8%	245 30.6%	107 18.8%
	シーズン	269 43.5%	182 44.5%	78 43.1%	183 48.2%	82 35.0%
単位が楽にとれると思ったから	春I	228 13.5%	183 15.8%	41 9.3%	169 15.2%	59 10.3%
	秋I	188 13.7%	154 15.7%	34 8.8%	119 14.9%	61 10.7%
	シーズン	122 19.7%	99 24.2%	17 9.4%	82 21.6%	39 16.7%
教職課程に必要なだから	春I	251 14.9%	162 14.0%	92 21.0%	149 13.4%	104 18.2%
	秋I	161 11.8%	66 6.7%	95 24.6%	81 10.1%	78 13.7%
	シーズン	116 18.7%	67 16.4%	46 25.4%	66 17.4%	50 21.4%
授業に空きがあるから・時間があるから	春I	325 19.3%	253 21.8%	85 19.4%	227 20.4%	101 17.6%
	秋I	272 19.9%	210 21.4%	62 16.1%	162 20.3%	104 18.3%
	シーズン	30 4.8%	20 4.9%	9 5.0%	12 3.2%	17 7.3%
昨年度履修してよいと思う種目、担当者があった	春I	78 4.6%	56 4.8%	37 8.4%	49 4.4%	25 4.4%
	秋I	82 6.0%	62 6.3%	20 5.2%	41 5.1%	36 6.3%
	シーズン	19 3.1%	11 2.7%	7 3.9%	13 3.4%	5 2.1%
友だちと一緒に楽しみたい	春I	326 19.3%	221 19.1%	114 26.0%	236 21.2%	90 15.7%
	秋I	252 18.4%	176 17.9%	76 19.7%	150 18.8%	93 16.4%
	シーズン	129 20.8%	63 15.4%	62 34.3%	84 22.1%	44 18.8%
その他	春I	98 5.8%	65 5.6%	30 6.8%	62 5.6%	37 6.5%
	秋I	79 5.8%	58 5.9%	21 5.4%	42 5.3%	36 6.3%
	シーズン	93 15.0%	56 13.7%	31 17.1%	59 15.5%	34 14.5%

4) 来年度の体育実技履修について

表2-9は来年度の実技履修についての回答である。ウィークリーで45%、シーズンスポーツでは35%が「履修する」であった。ウィークリーで男子の方が比率が高く、逆に「履修しない」は女子で高かった。シーズンでは男女差がなかった。学部別では、法学部、理工学部で「履修する」が多かった。また、ウィークリーの1年生では6割が「履修する」という回答であった。

表2-9 来年度以降も体育実技を履修するか（実数及び％）

	履修する			履修しない			未定		
	春I	秋I	シーズン	春I	秋I	シーズン	春I	秋I	シーズン
総数	767 45.8%	579 42.3%	221 35.7%	247 14.7%	205 15.0%	115 18.6%	662 39.5%	571 41.7%	281 45.4%
男子	604 52.1%	447 45.8%	147 35.9%	134 11.6%	150 15.4%	77 18.8%	416 35.9%	378 38.8%	184 45.0%
女子	124 28.2%	132 34.7%	66 36.5%	102 23.2%	55 14.5%	28 15.5%	210 47.8%	193 50.8%	86 47.5%
学部									
文	81 29.5%	51 23.4%	34 29.1%	45 16.4%	32 14.7%	21 17.9%	149 54.2%	135 61.9%	62 53.0%
経済	165 45.2%	127 43.8%	23 26.7%	54 14.8%	39 13.4%	19 22.1%	142 38.9%	124 42.8%	44 51.2%
法(政)	103 57.2%	78 48.4%	38 56.7%	15 8.3%	16 9.9%	3 4.5%	60 33.3%	67 41.6%	26 38.8%
法(法)	93 49.2%	93 45.6%	23 43.4%	32 16.9%	30 14.7%	7 13.2%	63 33.3%	81 39.7%	22 41.5%
商	119 44.2%	106 44.4%	22 29.3%	53 19.7%	55 23.0%	20 26.7%	95 35.3%	78 32.6%	32 42.7%
医	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	1 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 75.0%	1 50.0%	1 100.0%
理工	206 51.0%	123 51.0%	81 36.8%	47 11.6%	33 13.7%	45 20.5%	149 36.9%	85 35.3%	94 42.7%
学年									
1年	530 60.0%	467 56.3%	131 47.3%	49 5.5%	43 5.2%	29 10.5%	301 34.1%	319 38.5%	118 42.6%
2年	86 21.7%	91 20.4%	30 19.6%	121 30.5%	134 30.1%	52 34.0%	185 46.6%	220 49.4%	71 46.4%
3年	16 28.1%	18 40.0%	7 21.9%	6 10.5%	3 6.7%	10 31.3%	35 61.4%	24 53.3%	14 43.8%
複数年履修有り	105 28.0%	86 24.0%	39 24.7%	113 30.1%	102 28.4%	52 32.9%	174 46.4%	171 47.6%	66 41.8%
運動実施有り	537 48.2%	367 46.3%	155 40.8%	152 13.6%	114 14.4%	59 15.5%	418 37.5%	311 39.3%	165 43.4%

5) 学生による授業評価

図1は、授業に関する各質問項目の5段階評価を、「どちらともいえない」を0点として得点化し、平均と標準偏差を示したものである。全般には1点付近（そう思う）の評価が平均的であったが、施設、用具の充実面が相対的に低い評価であった。また、表2-10、2-11、2-12には春学期・秋学期各ウィークリーとシーズンの各種目別の評価を資料として掲載した。

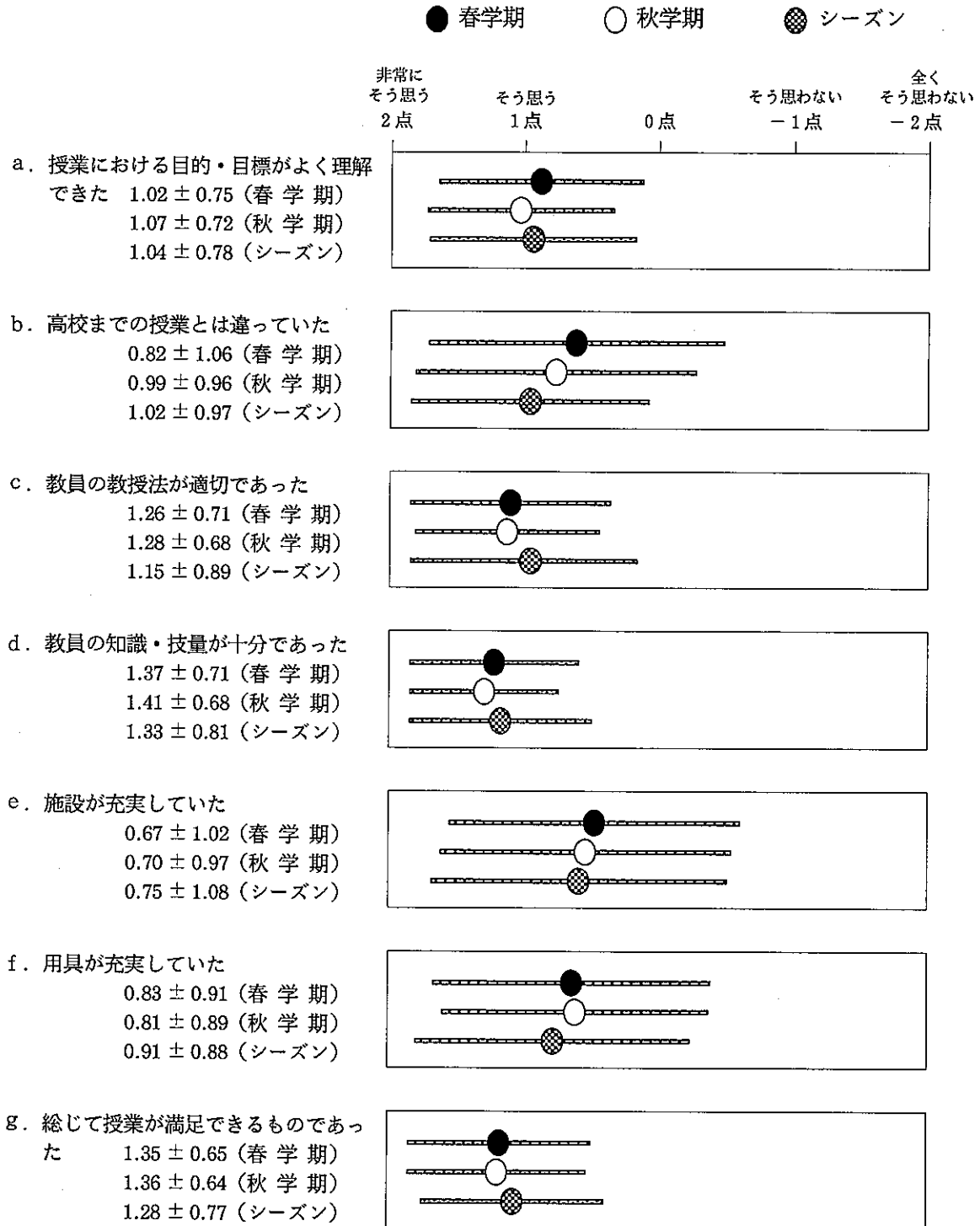


図1 学生による授業評価の全体平均

表2-10 春学期ウィークリースポーツ種目5段階評価一覧(順不同)

種 目		目的目標 高校比較 教授法 知識技量 施設充実 用具充実 授業満足						
		a	b	c	d	e	f	g
エアロビクス	AVG	1.23	1.05	1.59	1.48	0.92	0.85	1.59
	N=99 SD	0.59	0.94	0.53	0.75	0.84	0.78	0.50
ゴルフ	AVG	1.03	1.24	1.16	1.35	0.23	0.73	1.25
	N=75 SD	0.64	0.77	0.81	0.61	0.98	0.79	0.71
サッカー	AVG	0.81	0.27	1.05	1.23	-0.15	0.22	1.18
	N=207 SD	0.78	1.12	0.65	0.72	1.06	0.93	0.69
ジョギング	AVG	1.23	1.38	1.69	1.85	0.31	0.38	1.23
	N=13 SD	0.73	0.77	0.48	0.38	0.95	1.04	0.73
ソフトテニス	AVG	1.27	0.45	1.55	1.73	0.55	0.64	1.45
	N=11 SD	0.79	0.93	0.52	0.47	0.82	0.67	0.52
ソフトボール	AVG	0.78	0.64	0.98	0.97	0.53	0.83	1.29
	N=236 SD	0.78	1.09	0.81	0.74	0.89	0.86	0.68
ダンス	AVG	1.07	1.21	1.26	1.47	0.85	0.71	1.35
	N=73 SD	0.78	0.79	0.76	0.55	1.00	1.02	0.67
テニス	AVG	1.09	0.96	1.38	1.59	0.87	0.79	1.41
	N=160 SD	0.69	0.91	0.64	0.55	0.95	0.91	0.64
ニュースポーツ	AVG	0.94	1.12	1.39	1.30	0.43	0.87	1.23
	N=84 SD	0.86	1.00	0.62	0.65	0.99	0.82	0.66
ハンドボール	AVG	1.18	0.96	1.18	1.43	0.82	1.07	1.46
	N=28 SD	0.55	0.92	0.48	0.50	1.06	0.81	0.64
ホッケー	AVG	1.45	0.73	1.55	1.64	1.73	1.73	1.73
	N=11 SD	0.52	1.19	0.52	0.50	0.47	0.47	0.47
バスケットボール	AVG	0.94	0.76	1.17	1.38	0.71	0.93	1.32
	N=341 SD	0.81	1.07	0.77	0.76	1.02	0.85	0.69
バドミントン	AVG	1.02	0.67	1.28	1.59	0.76	0.91	1.24
	N=187 SD	0.69	0.98	0.58	0.53	0.92	0.95	0.67
バレーボール	AVG	0.97	0.48	1.08	0.99	0.33	0.56	1.38
	N=261 SD	0.75	1.21	0.73	0.84	1.00	0.95	0.62
ラクロス	AVG	0.85	0.79	1.15	1.50	0.65	0.79	1.35
	N=34 SD	0.66	1.07	0.74	0.62	0.81	0.81	0.60
弓道	AVG	1.47	1.33	1.20	1.80	1.73	1.47	1.47
	N=15 SD	0.52	0.72	0.77	0.41	0.59	0.83	0.74
合気道	AVG	1.07	1.00	1.41	1.55	0.72	1.00	1.34
	N=29 SD	0.53	0.93	0.50	0.51	0.70	0.71	0.48
剣道	AVG	1.05	1.08	1.68	1.85	1.30	1.30	1.50
	N=40 SD	0.65	1.06	0.53	0.36	0.76	0.76	0.51
柔道	AVG	1.38	1.12	1.48	1.69	1.40	1.26	1.67
	N=42 SD	0.62	0.78	0.55	0.52	0.70	0.80	0.53
水泳	AVG	1.50	1.33	1.69	1.81	1.31	1.20	1.63
	N=102 SD	0.58	0.85	0.49	0.39	0.81	0.82	0.51
体力アップ	AVG	1.38	1.35	1.67	1.68	1.46	1.43	1.53
	N=115 SD	0.60	0.78	0.51	0.52	0.67	0.66	0.52
卓球	AVG	0.97	0.75	1.16	1.22	0.61	0.71	1.37
	N=63 SD	0.81	1.12	0.75	0.71	0.93	0.79	0.73
野球	AVG	0.72	1.13	1.13	1.33	0.64	0.85	1.05
	N=39 SD	0.76	0.66	0.57	0.58	0.84	0.78	0.60
陸上競技	AVG	0.80	1.20	1.40	1.60	0.40	0.80	1.60
	N=5 SD	0.45	0.45	0.55	0.55	1.14	1.30	0.55

表2-11 秋学期ウィークリースポーツ種目5段階評価一覧(順不同)

種 目		目的目標 高校比較 教授法 知識技量 施設充実 用具充実 授業満足						
		a	b	c	d	e	f	g
エアロビクス	AVG	1.21	1.01	1.54	1.53	1.01	0.76	1.59
	N=81 SD	0.63	0.93	0.55	0.55	0.73	0.78	0.54
ゴルフ	AVG	0.89	1.32	1.08	1.34	0.61	0.85	1.19
	N=93 SD	0.77	0.71	0.82	0.68	0.92	0.86	0.59
サッカー	AVG	1.04	0.64	1.23	1.45	0.01	0.35	1.33
	N=155 SD	0.63	1.08	0.62	0.58	1.08	0.92	0.56
ジョギング	AVG	1.25	0.97	1.36	1.52	0.48	0.46	1.41
	N=29 SD	0.52	0.91	0.49	0.69	0.69	0.74	0.57
ソフトテニス	AVG	1.50	1.13	1.75	2.00	0.75	1.13	1.75
	N=8 SD	0.76	0.99	0.46	0.00	0.71	0.64	0.46
ソフトボール	AVG	0.90	0.81	0.95	1.00	0.45	0.91	1.34
	N=188 SD	0.80	1.12	0.84	0.79	0.96	0.85	0.62
ダンス	AVG	1.03	1.14	1.41	1.46	0.44	0.22	1.41
	N=64 SD	0.73	0.86	0.53	0.56	0.87	0.83	0.58
テニス	AVG	1.14	1.01	1.38	1.47	0.98	1.02	1.42
	N=161 SD	0.70	0.93	0.56	0.63	0.89	0.79	0.64
ニュースポーツ	AVG	1.00	1.20	1.32	1.27	0.73	1.00	1.18
	N=56 SD	0.79	0.98	0.54	0.59	0.82	0.63	0.79
ハンドボール	AVG	1.06	1.33	1.44	1.61	1.06	1.17	1.50
	N=18 SD	0.54	1.08	0.51	0.50	0.87	0.79	0.51
ホッケー	AVG	1.18	1.64	1.73	1.73	1.73	1.73	1.73
	N=11 SD	0.87	0.67	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65
バスケットボール	AVG	1.05	0.92	1.29	1.44	0.83	0.93	1.33
	N=223 SD	0.71	0.91	0.67	0.63	0.84	0.81	0.66
バドミントン	AVG	0.92	0.74	1.14	1.50	0.90	0.69	1.18
	N=137 SD	0.61	0.94	0.68	0.62	0.80	0.80	0.69
バレーボール	AVG	1.16	0.91	1.30	1.24	0.44	0.53	1.47
	N=195 SD	0.76	1.02	0.67	0.73	1.09	1.06	0.68
ラクロス	AVG	0.78	1.22	1.16	1.50	0.74	0.98	1.18
	N=46 SD	0.76	0.70	0.67	0.72	0.77	0.77	0.65
弓道	AVG	1.35	1.15	1.65	1.70	1.60	1.40	1.40
	N=20 SD	0.49	0.81	0.49	0.47	0.50	0.60	0.60
合気道	AVG	1.35	1.23	1.61	1.74	1.13	1.06	1.58
	N=31 SD	0.55	0.67	0.50	0.44	0.76	0.77	0.50
剣道	AVG	1.33	1.50	1.67	1.88	1.50	1.42	1.63
	N=24 SD	0.48	0.72	0.48	0.34	0.78	0.78	0.49
柔道	AVG	1.43	1.38	1.70	1.93	1.10	1.05	1.63
	N=41 SD	0.75	0.78	0.52	0.27	0.90	0.85	0.49
水泳	AVG	1.80	2.00	2.00	2.00	1.40	1.40	2.00
	N=5 SD	0.45	0.00	0.00	0.00	0.89	0.89	0.00
体力アップ	AVG	1.33	1.33	1.49	1.65	0.97	0.99	1.33
	N=104 SD	0.67	0.72	0.62	0.48	0.97	0.99	0.69
卓球	AVG	1.00	0.76	1.12	1.13	0.70	0.95	1.23
	N=83 SD	0.72	0.91	0.69	0.92	0.88	0.82	0.63
野球	AVG	0.70	1.15	1.07	1.44	0.48	0.74	1.19
	N=27 SD	0.72	0.86	0.78	0.64	0.85	0.71	0.56
陸上競技	AVG	1.08	1.42	1.42	1.50	1.08	1.08	1.42
	N=12 SD	0.51	1.00	0.51	0.52	0.79	0.79	0.51

表2-12-1 シーズンスポーツ種目5段階評価別一覧 1 (順不同)

種目		目的目標	高校比較	教授法	知識技量	施設充実	用具充実	授業満足
		a	b	c	d	e	f	g
レスリング	AVG	0.86	1.00	1.14	1.29	1.57	1.43	1.43
	N=7 SD	0.69	0.58	0.69	0.76	0.79	0.79	0.79
器械体操	AVG	0.92	1.33	1.42	1.50	1.42	1.33	1.50
	N=12 SD	0.79	0.65	0.67	0.52	0.67	0.78	0.67
新体操	AVG	1.25	1.25	1.75	1.75	0.75	0.38	1.63
	N=8 SD	0.71	0.71	0.46	0.46	0.71	1.06	0.52
柔道	AVG	1.43	1.57	1.71	2.00	0.86	0.86	1.43
	N=7 SD	0.53	0.79	0.49	0.00	0.69	0.90	0.53
サッカー	AVG	0.89	0.79	1.11	1.21	-0.14	0.21	0.82
	N=28 SD	0.57	0.69	0.42	0.63	0.97	0.79	0.67
7x7フットボール	AVG	1.42	1.70	1.59	1.45	1.68	1.36	1.86
	N=44 SD	0.59	0.67	0.54	0.82	0.52	0.75	0.35
ダンス	AVG	1.54	1.27	1.62	1.77	0.92	0.73	1.58
	N=26 SD	0.51	0.72	0.64	0.43	0.84	0.83	0.64
水泳	AVG	1.10	1.17	1.25	1.52	1.12	1.03	1.35
	N=60 SD	0.73	0.83	0.58	0.57	0.78	0.78	0.63
軟式野球	AVG	0.27	0.88	-0.62	-0.23	0.81	0.84	0.69
	N=26 SD	0.96	1.03	1.44	1.42	1.06	0.99	0.93
バレーボール	AVG	0.82	0.38	0.86	1.00	-0.14	0.27	0.98
	N=52 SD	0.72	0.99	0.70	0.90	1.03	0.84	0.68
剣道	AVG	1.33	0.83	2.00	2.00	1.00	0.83	1.67
	N=6 SD	0.52	0.98	0.00	0.00	0.89	0.75	0.52
フェンシング	AVG	1.13	1.38	1.63	1.63	0.88	1.13	1.75
	N=8 SD	0.99	0.74	0.52	0.52	0.83	0.64	0.46
自動車	AVG	1.56	1.56	1.53	1.62	0.36	0.42	1.42
	N=44 SD	0.50	0.62	0.55	0.49	1.03	0.99	0.66
ヨット	AVG	1.17	1.50	1.39	1.44	-0.39	0.78	1.39
	N=19 SD	0.86	0.71	0.70	0.70	1.24	1.00	0.78
弓術	AVG	1.52	1.31	1.97	1.93	1.48	1.24	1.96
	N=29 SD	0.63	0.93	0.19	0.26	0.69	0.79	0.19
ソフトボール	AVG	0.89	1.11	1.22	1.50	1.33	1.61	1.33
	N=19 SD	0.96	0.90	0.81	0.71	0.77	0.61	0.84
硬式野球	AVG	0.63	0.50	1.25	1.38	1.00	1.00	1.13
	N=8 SD	0.92	0.76	0.71	0.52	0.93	0.93	0.83
ボクシング	AVG	1.63	1.30	1.95	1.95	1.35	1.25	1.85
	N=20 SD	0.50	0.66	0.22	0.22	0.59	0.72	0.37
ホッケー	AVG	0.96	0.71	1.04	1.25	1.50	1.54	1.32
	N=28 SD	0.51	1.05	0.58	0.59	0.64	0.58	0.48
馬術	AVG	1.02	1.36	0.95	1.12	0.14	0.83	0.95
	N=42 SD	0.81	0.91	0.79	0.77	1.24	0.95	0.99
バドミントン	AVG	0.76	0.17	0.75	1.02	0.46	0.63	0.93
	N=57 SD	0.76	1.10	0.76	0.75	1.00	0.86	0.78
バスケットボール	AVG	0.86	1.10	1.13	1.29	0.78	1.14	1.26
	N=57 SD	0.69	0.91	0.60	0.73	1.08	0.76	0.69

表2-12-2 シーズンスポーツ種目5段階評価別一覧 2 (順不同)

種目		目的目標	高校比較	教授法	知識技量	施設充実	用具充実	授業満足
		a	b	c	d	e	f	g
陸上競技	AVG	1.67	1.33	2.00	2.00	1.67	1.67	2.00
	N=3 SD	0.58	1.15	0.00	0.00	0.58	0.58	0.00
アメリカンフットボール	AVG	1.83	1.33	2.00	2.00	1.67	1.67	2.00
	N=6 SD	0.41	0.82	0.00	0.00	0.52	0.52	0.00
卓球	AVG	0.31	0.31	-0.21	0.79	0.00	0.72	0.48
	N=29 SD	0.97	1.11	1.21	0.82	1.09	0.70	0.99
空手	AVG	1.00	0.75	1.41	1.65	1.18	1.12	1.47
	N=17 SD	0.71	0.77	0.62	0.49	0.64	0.60	0.62
少林寺拳法	AVG	1.43	1.00	1.14	1.57	1.43	1.43	1.57
	N=7 SD	0.53	0.82	0.69	0.53	0.53	0.53	0.53
相撲	AVG	1.25	1.25	1.25	1.75	1.25	0.50	1.00
	N=4 SD	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.58	0.82
重量挙げ	AVG	1.22	0.78	1.33	1.33	0.78	0.78	1.33
	N=9 SD	0.44	0.97	0.50	0.50	0.83	0.83	0.50
ラグビー	AVG	1.00	1.33	1.20	1.50	1.17	1.42	1.67
	N=6 SD	0.63	0.52	0.45	0.55	0.75	0.66	0.52
ゴルフ	AVG	0.40	1.06	0.34	0.74	-0.11	-0.40	0.74
	N=33 SD	0.88	0.68	0.80	0.92	1.05	0.91	0.70
ハンドボール	AVG	0.93	1.07	0.93	0.93	1.27	1.33	1.20
	N=15 SD	0.88	0.80	1.03	0.80	0.70	0.62	0.77
洋弓	AVG	0.88	1.25	1.29	1.33	0.50	0.54	1.08
	N=24 SD	0.80	0.74	0.69	0.70	0.93	0.88	0.83
テニス	AVG	1.20	1.18	1.52	1.68	1.52	1.30	1.41
	N=54 SD	0.64	0.86	0.66	0.58	0.66	0.85	0.65
スケート	AVG	1.28	1.21	1.41	1.54	1.18	1.05	1.44
	N=39 SD	0.69	0.77	0.79	0.72	0.72	0.89	0.64
スキー	AVG	0.83	0.52	0.94	1.34	0.39	0.45	0.85
	N=137 SD	0.93	1.21	1.01	0.83	1.11	1.06	1.08
合気道	AVG	1.30	1.26	1.52	1.52	0.59	0.89	1.44
	N=26 SD	0.67	0.86	0.51	0.51	0.89	0.70	0.58

6) 体育科目に関する要望・意見について

自由記述で回答を求めた体育科目への意見について、類似する項目でまとめ以下に示した。

三田の授業について

- ・三田の開講授業数を増やして欲しい
- ・三田の体育履修に関する情報が少なすぎる

抽選について

- ・人気の種目は定員をもっと増やして欲しい
- ・4年生は優先して履修をさせて欲しい
- ・男子優先と書いていないのに女子が全員落とされるのはおかしい
- ・抽選に漏れたら他の種目は優先的にしてほしい

時間割りにについて

- ・4, 5限にもっと開講して欲しい
- ・土曜日の授業を増やして欲しい
- ・2限通しの授業を作って欲しい
- ・現行の授業を閉鎖しないでほしい
- ・人気のない種目を減らして人気種目を増やすべきである
- ・同じ種目と同じ曜日に集中しているので希望が通りにくい

履修について

- ・履修手続きの簡略化を望む
- ・秋学期は秋学期で履修登録したい
- ・履修者が増えるよう体育の必修化
- ・昨年度と全く同じ先生の授業を受けたい
- ・大学院にも体育を設置して欲しい

単位について

- ・体育を2単位に
- ・シースポの単位を増やして
- ・理工の認定単位を増やして欲しい
- ・体育の卒業認定単位数を増やして欲しい
- ・1年間に履修できる数を増やして欲しい

施設について

- ・体育館の開放, 新築
- ・三田にグラウンドを, 綱町グラウンドの開放
- ・三田体育施設の充実(体育館)
- ・テニスコートの開放
- ・競技場の水はけの改善
- ・更衣室が汚い
- ・ロッカーの充実
- ・室内プールの建築

運営面について

- ・雨の日の掲示をもっとわかりやすく
- ・着替える時間が足りない
- ・初級者クラスに上級者を混ぜないで
- ・シースポの受講料が高すぎる
- ・病気等で見学のときにも授業に参加できるよう課題を与えて欲しい
- ・危険を伴う種目は教員の目のいき届く人数を越えない
- ・音楽を流しながら授業をして欲しい

各種目についての要望

サッカー

- ・下田グラウンドが遠すぎる
- ・グラウンドが雨に弱いので休講がおおい
- ・グラウンドを芝か人工芝にして欲しい
- ・下田にシャワールームが欲しい
- ・三田にもサッカーを作って欲しい
- ・授業以外でもグラウンドとボールを使いたい

- ・4限にもサッカーを作って欲しい

バレーボール

- ・記念館でやりたい
- ・レベル別, または男子のみの講座を作って欲しい
- ・人数が少ないのでゲームにならない
- ・きれいなボールを使いたい
- ・三田に室内バレーボールの設置

ゴルフ

- ・場所が遠すぎる
- ・ゴルフコースでラウンドしたい
- ・打撃スペースが狭い
- ・三田にゴルフの設置
- ・人数が多いので指導がいき届かない
- ・初回の授業のときに場所がわからなかった

卓球

- ・卓球場にエアコンを作って
- ・トーナメント形式でやりたい
- ・用具の充実
- ・うがいをする水道がない
- ・レベル分けしたい
- ・女子更衣室が遠い
- ・ダブルスのパートナーを固定して練習したい

柔道

- ・道場のエアコン化
- ・乱取り中心の授業をやりたい
- ・女子とやりたい

テニス

- ・クレーでないコートでやりたい
- ・授業の増設
- ・室内コートで雨でもやりたい
- ・1人あたりのコートが狭い(クラスの人数が多い)

バドミントン

- ・テストを辞めて欲しい
- ・授業のレベルが高すぎる
- ・照明がまぶしい
- ・試合形式でやりたい

体力アップ

- ・トレーニングルームの充実
- ・サッカーやソフトボールも取り入れて欲しい
- ・「種目ごとに指導」とあったが, 実際はそうではなかった
- ・実技をもっとしたい

ソフトボール

- ・人が少ない
- ・寒くても授業をすべき

ジョギング

- ・もっとハードなものを

ダンス

- ・大きな鏡の設置
- ・ダンスシューズを使ってもよい部屋の希望

水泳

- ・秋学期の増設
- ・卒業してからもプールを利用したい

エアロビクス

- ・もっとヒップホップでやりたい

- ・ビデオをみながらステップをつかったものがしたい

野 球

- ・グラブの手入れが悪い

バスケットボール

- ・ゲーム形式の授業を ・もっと初心者によさしく

ス キ ー

- ・授業の内容、必要な経費の詳細をもっと事前に知りたい
- ・費用が高いのではないか？ 団体バスの利用を考えて欲しい
- ・もっと細かい個人的な技術指導をして欲しかった ・消灯時間が早すぎるのではないか
- ・班によって指導方法の違いがあり過ぎる、上級班だけ優遇し過ぎ
- ・実施場所・指導ともに素晴らしかった
- ・最初と最後の2日間をもっと有効に使いたかった

スケート

- ・合宿でないスケートの授業もやって欲しい ・素晴らしかった、もっと安いと最高
- ・授業は体育会の学生が雰囲気をもたせてくれて楽しかった

7) 塾内で開催を希望するスポーツイベントについて

6)の項目同様に、自由記述で回答があったスポーツイベントの開催希望について以下にまとめた。

イベント関係

- ・体育会の試合観戦企画 ・スポーツ選手講習会 ・運動会 ・寒中水泳大会
- ・アウトドア大会 ・スクーバ合宿 ・マリンスポーツ企画 ・ダンスパーティー
- ・スキー教室 ・体育会運動会 ・クラス対抗運動会 ・サークル対抗運動会
- ・学部対抗運動会

大会関係

- ・マラソン ・駅伝 ・トライアスロン ・水泳 ・スキー ・スノーボード
- ・筋肉番付 ・サッカー ・フットサル ・11人制サッカー ・三田サッカー
- ・女子サッカー ・野球 ・軟式野球 ・テニス ・バスケットボール ・3オン3
- ・バレーボール ・ビーチバレー ・ホッケー ・卓球 ・ソフトボール
- ・柔道 ・相撲 ・剣道 ・剣道昇段・級審査 ・タッチフット
- ・ドッジボール ・ボーリング ・ゴルフ

3. 新カリキュラムの経過と教育分野の今後

本章の冒頭にもふれたように、体育研究所設置の保健体育科目の選択化が実施され4年が経過し、平成8年度からすべての学部において必修科目としての扱いはなくなった。その間に体育研究所では、塾生のニーズに応えることのできるような授業展開等の様々な観点から、新たな大学における体育科目の在り方を検討してきた。以下に、新カリキュラム実施の経過と今後について簡単にまとめた。

カリキュラム改訂による最初の課題は、「内容の多様化」と「選択肢の拡大」であった。特に、必修時には、画一的に少数の種目を限定的に実施する形式であった体育実技Ⅰにおいて、開講種目を20種目以上に増やし、かつ1年次のみであった履修年次を、全学部共通に4年間履修可能とした。この措置は、半期で完結するというセメスター制導入と相まって、ウィークリースポーツ開講数を300コマ近くにすものとなったが、実際の履修者数は、平成5年度より毎年増加して、上級学年、三田の履修も増加の傾向が認められる。

一方、休業中に集中して実施する体育実技Ⅱ（シーズンスポーツ）においては、必修時と同じ40余りの種目を実施してきた。しかしながら、シーズン性の特色を生かし、また体育会各部の協力のもと、慶應義塾独自の多様性のあるものとすべく、改革のための論議が重ねられてきた。その具体的な活動として、シーズンスポーツ実技指導員との懇談会を2回にわたり開催した（資料1）。この懇談会の主な目的は、各実技指導員にカリキュラム改訂の経緯と現状について把握してもらい、慶應義塾のシーズンスポーツの進む方向について共に議論することであった。第1回は、学生の授業評価結果、履修者数の動向、予算配分等の多岐にわたる、シーズンスポーツ全体の現状の分析と問題点の提起を行った。これを受け、第2回では、同傾向の課題を抱える種目によるグループ別に討論を行い、指導員側の様々な意見を得た。この討論での柱は「シーズンスポーツの特徴は何か」「改革の問題点は何か」「シーズンスポーツと体育会活動の関連性」の3つであった。シーズンスポーツの特色としては、自然と触れ合うようなシーズン性の強い種目、体験機会の少ない種目、合宿の体験などが挙げられ、これらを意識した教育内容の重視が確認された。そして、そのための問題点として、履修者数・施設用具・指導スタッフ・実施期間の4つが具体的課題とされ、体育研究所と体育会各部との組織的な協力と相互理解と合わせ、早急に対応していく必要があるとの認識を得た。

さらに、こうした経緯を踏まえて、シーズンスポーツの実施状況の把握と協力体制の確立を目的として、合宿種目である冬季実施種目（スキー、スケート）について視察を実施した（資料2）。尚、通信教育部のスキー実技（体育会スキー部OBを中心に実施されている）についても、同様の目的で視察を実施した。いずれの種目も、充実した授業内容で、通常体験の出来ない種目としての意義が認められたが、運営方法においては実技指導員を中心として独自の方法がとられていた様に思われた。今後、体育研究所として、より合理的な実施方法を検討するため、履修生の意見等も取り入れながら、各種目実技指導員との連携を強めていく必要が認められた。さらに、こうした視察を今後多種目に広げる意向である。

新カリキュラム4年目を終え、延べ9,000名を越す学生が体育実技及び講義を受講している。今後の課題は世界の慶應義塾、21世紀の大学教育の一端を担うべく、「実施内容の質的向上」「実施上の人的・経済的効率の向上」をはかることであり、そのために「自己改革、自己点検」を繰り返すことが重要である。平成8年度は、ウィークリースポーツクラスにおいて新たに弓

術が開設された。更に平成9年度にはアメリカンタッチフットボール、ボクシング、インドアスポーツが開設される予定である。講義科目においても学生のニーズに応えられるよう幅広い分野での講義内容を検討している。また、履修申告についても、抽選洩れの学生にもより多くの種目が追加登録できるよう、独自の方法を模索しているところである。選択科目ゆえにできる幅広い授業展開を、一層、積極的に進める必要がある。

資料1 シーズンスポーツ実技指導員懇談会 記録

第1回 平成8年2月24日(平成7年度) 於:新研究室棟会議室

出席者…指導員28名、体育研究所所長、教育委員8名、主事

- 内容
1. 体育研究所所長挨拶 高嶺所長
 2. 配付資料の説明
 - ・シーズンスポーツの改革について 定員、予算、指導スタッフ
 - ・スポーツクラス開設種目実態調査書
 - ・シーズンスポーツアンケート調査結果説明者 近藤(教育委員長)、吉田(教育委員)、村山(カリキュラム係)
 3. 質疑及び討論
司会進行 高嶺、石手(教育委員)

第2回 平成8年6月15日 於:新研究室棟会議室

出席者…指導員26名、体育研究所所長、所員15名、主事

- 内容
1. 体育研究所所長挨拶 高嶺所長
 2. 本年度体育実技Ⅱ実施に当たっての説明
説明者 近藤(教育委員長)、御園生(主事)
 3. 配付資料説明および懇談会の主旨説明
 - ・「体育実技Ⅱ(シーズンスポーツ)のあり方について」
 - ・定員充足率の推移(全体およびシーズン各種目)説明者 近藤(教育委員長)
 4. 実施種目のタイプ別で討論
 - a 球技系 進行記録 石手、綿田、山内、上向(委員及び係)
 - b 武道・格闘技系 進行記録 吉田(委員)
 - c 個人競技 進行記録 松田、佐々木(委員)
 - d 合宿種目 進行記録 村山(係)

資料2 冬季種目(シーズンスポーツ、通信教育部)視察記録

対象種目:

- (1) 通信教育冬期体育実技スクーリング「スキー」:2月1日(土)~5日(水)
戸狩スキー場(長野県飯山市) 63名(男子24名、女子39名)

- (2) シーズンスポーツ「スケート」：2月4日(火)～2月8日(土)
軽井沢スケートセンター 39名(男子19名、女子20名)
- (3) シーズンスポーツ「スキー」：2月8日(土)～12日(水)
志賀高原発哺温泉スキー場 138名(男子104名、女子34名)
- 参加所員：石手 靖・村山光義・松田雅之・野口和行

第3部 スポーツ振興分野

概 要

体育研究所では、保健体育科目の開講、体育・スポーツに関する研究活動と並んで、慶應義塾における健康・スポーツに関する様々な情報を発信及び推進していく基地としての役割を果たしていきたいと考えている。具体的には、広く学生・教職員を対象としたスポーツに関するイベントの開催、キャンパス内のスポーツ施設の有効利用、スポーツを媒介とした塾内他機関との連携等である。

第1節では、体育研究所が主催した学生対象、教職員対象のスポーツイベントの内容をまとめた。

第2節では、塾内の他機関と連携したイベント、講習会の内容についてまとめた。

第3節では、スポーツ施設の有効利用として行っている所内施設の開放、3Fエクササイズスタジオと1Fトレーニングルームの利用状況についてまとめた。

1. 各種スポーツイベントの開催

1) 学生対象イベント

(1) ソフトボール大会

日 時：5月18日（土）、25日（土） 9：30～14：30

場 所：日吉陸上競技場

参加者：11チーム、145名



今回初めて実施された種目。ルールは5回もしくは40分で打ち切りのルールで、教員チームを含めた全12チームが、爽やかな五月晴れの下白球を追った。1点差のシーソーゲームあり、点差関係なしのほのぼのとしたゲームあり、決勝は予想外の大差で、スポーツイベント常連のチームが優勝を飾った。

(2) テニス大会

日 時：9月28日（土）、10月5日（土） 9：30～14：30

場 所：日吉蝮谷テニスコート

参加者：6チーム、45名

体育会テニス部の全面的なバックアップを得て、蝮谷のテニスコートで行われた。告知の時期が試験と重なったこともあり参加チームは少々寂しかったが、教員チーム、体育会チームとも試合を組み、体育会、教員、学生の交流の輪が広がった。さすがに現役体育会部員、オープン参加ながら全チームを一蹴した。ちなみに、優勝はテニスサークルで作ったチーム。

(3) ミニサッカー大会

日 時：11月9日（土）、16日（土） 9：30～14：30

場 所：日吉陸上競技場

参加者：16チーム、215名



今回で3回目を迎える歴史あるスポーツイベント？ 体育会サッカー部の協力を得て行われた。人気の高い大会で、募集するとすぐに満員御礼となる。やはり継続は力なり。初日、グラウンドの状態が悪く1面でしかゲームができなかったため、12分ハーフと例年より短くなった。4チームによる予選リーグの後、各リーグの1位で決勝トーナメント。大学の有力サッカーサークルが軒並み参加し、レベルの高い攻防が繰り広げられた。

2) 教職員対象イベント

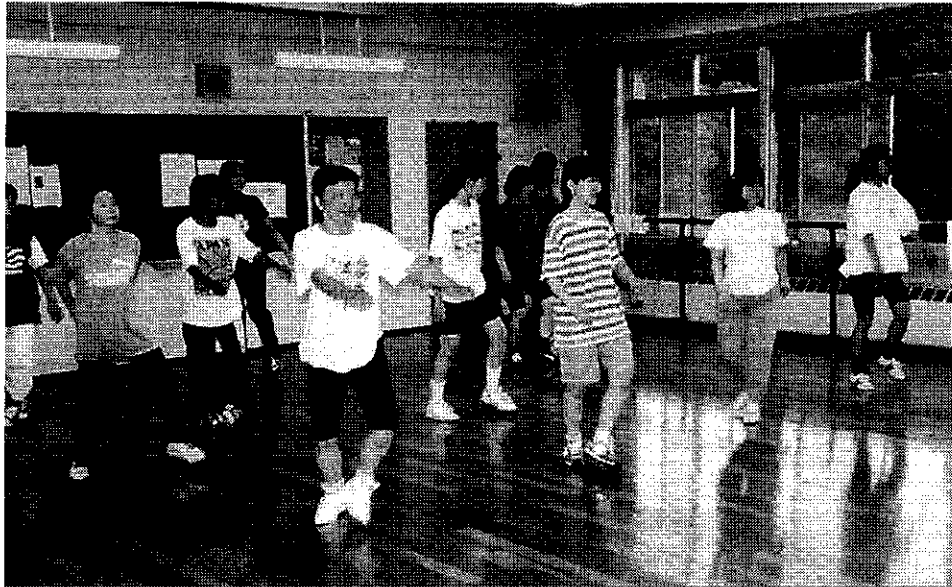
(1) フィットネス教室（春）

日 時：5月9日～6月20日 毎週木曜日17：00～18：00（全7回）

場 所：体育研究所3F エクササイズスタジオ

担 当：佐々木玲子（体育研究所）

参加者：16名



初夏の爽やかな気候のもと、昨年の秋に引き続いて第2回目のフィットネス教室が始まった。開始に当たっての簡単なメディカルチェック、及び毎回の脈拍、血圧はじめ体調がチェックされ、安全に、健康作りのためのプログラムが展開された。内容は、音楽に合わせてのエアロビックダンスで、強度の低い「ソフトエクササイズ」を中心に楽しく和やかな雰囲気で行われた。

新しいメンバーも加わり、参加者の皆さん、それぞれ気持ちよく汗をかかれています。最終回終了後、皆で飲む打ち上げのビールは最高である。

(2) トレーニング教室 (春)

日 時：5月9日～7月11日 毎週月、木曜日16:30～18:00 (全19回)

場 所：体育研究所1F トレーニングルーム

担 当：近藤明彦 (体育研究所)

参加者：11名

一部の教職員の要望に応じて昨年後期から行われていたトレーニング教室が、本年度より体育研究所のスポーツ振興分野が行う教職員対象のイベントとなった。参加者に事前に記入していただいた健康チェックのための質問票は、スポーツ医学研究センター・保健管理センターの協力のもと、運動の実施についての可否、並びに運動実施上の制限等に関するチェックとして用いられた。使用する機器の説明・健康関連体力テストによる体力レベルのチェック等の後、各自のペースでトレーニングは継続されていった。実施種目は、各自の目的にあわせたものであり、有酸素系の運動を中心に体重コントロールを目指す方から、筋力トレーニングを中心にシェイプアップをはかる方まで様々であった。参加状況は、参加者各自の業務等の都合によりまちまちであったが、途中休まずに継続的に参加された方々の体力レベルの変化には見違えるものがあった。

(3) ボールルームダンス教室

日 時：5月14日～6月25日 毎週木曜日17:00～18:00 (全7回)

場 所：体育研究所3F エクササイズスタジオ

担 当：篠原しげ子 (体育研究所)

参加者：5名

ジルバ、ルンバ、ワルツの3種目を行った。男性の参加が少なかったため、男子学生の希望者にも参加を認め、教員、職員、学生のほほえましいカップルでダンスを楽しんだ。

(4) フィットネス教室 (秋)

日 時：10月17日～12月12日 毎週木曜日17:00～18:00 (全7回)

場 所：体育研究所3F エクササイズスタジオ

担 当：佐々木玲子 (体育研究所)

参加者：6名

秋の清々しい気候のもと、春に引き続き第3回目のフィットネス教室が開催された。内容も過去2回と同様、楽しく健康作りをすることを目標にエアロビックダンスエクササイズが行われた。参加メンバーの中には第1回目から継続して参加されている方もあり、だいたいの動きにも雰囲気にも慣れてきたように見受けられる。

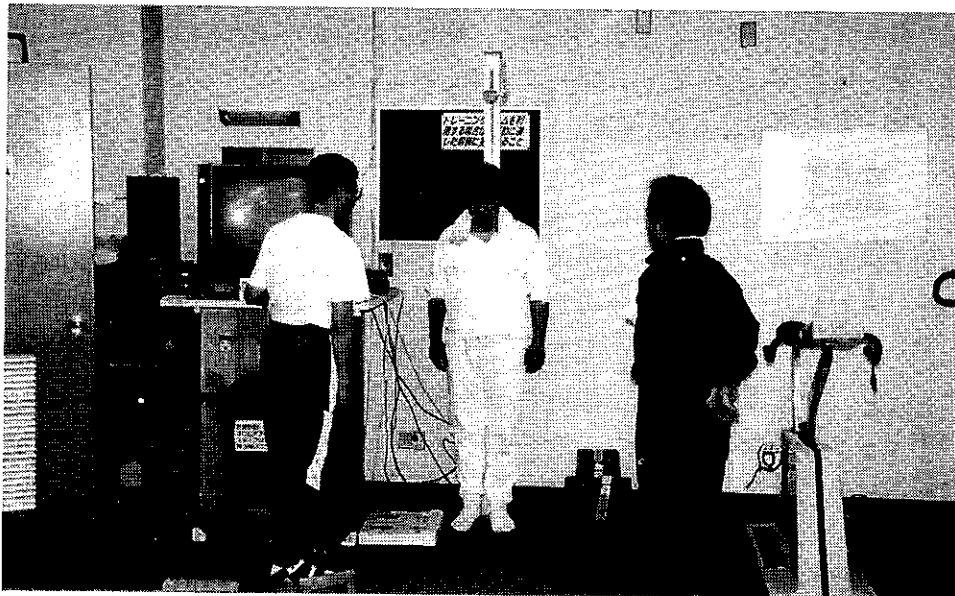
打ち上げのビールは夏でなくても最高である。

(5) トレーニング教室 (秋)

日 時：10月14日～1月20日 毎週月、木曜日16:30～18:00 (全19回)

場 所：体育研究所1F トレーニングルーム

担 当：近藤明彦 (体育研究所) 参加者：6名



春に引き続いてのトレーニング教室であったが、参加者の多くは春の教室から引き続いてということで、各自のペースに合わせて思い思いにトレーニングが行われていた。参加者の方々の熱心さには驚くばかりであり、7時過ぎまでトレーニングが行われることもしばしばであった。

2. 大学生生活懇談会とのタイアップ事業

1) 須藤豊氏講演会「マイ・ベースボール」の企画

講演：須藤豊氏（野球評論家、前読売ジャイアンツヘッドコーチ）

日時：6月27日（木） 16:30～18:00

場所：日吉第4校舎B棟11番教室

主催：学生総合センター大学生生活懇談会

350名という大観衆の中、須藤氏の講演は始まった。時にはユーモアを交えながら、須藤氏の指導論・野球理論を始め、現在のプロ野球の状況など話題は具体的な体験を交えながら多岐にわたった。後半は、日本テレビの吉田眞一郎氏を司会に、体育会野球部、野球サークルの部員も交えての野球談義となった。アンケートの結果も好評で、今後も学生総合センターとの連携を深めてこのような企画を進めていく必要を感じた。

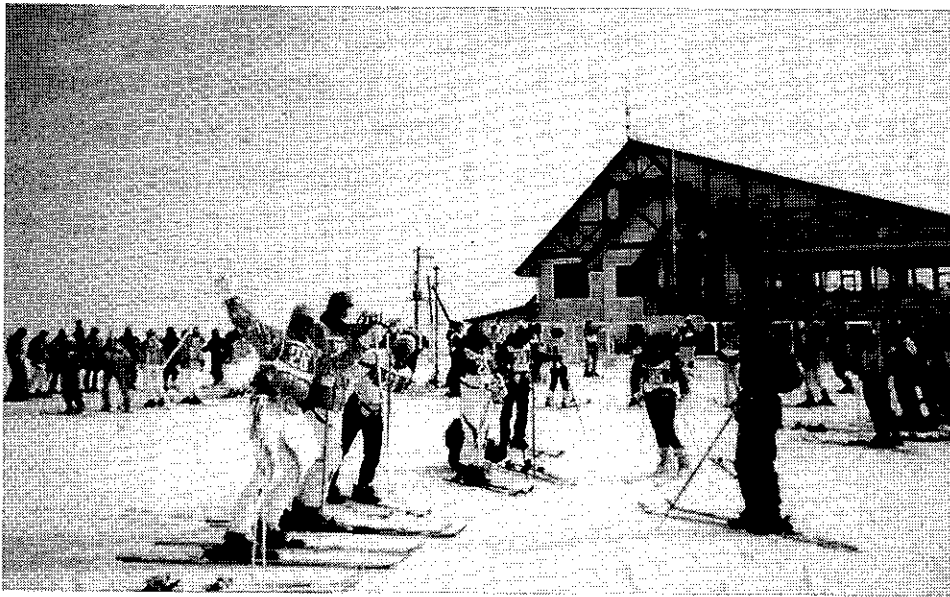
2) 第11回「スキーのつどい」への講師派遣

期間：平成9年2月8日（土）～11日（火）

場所：新潟県六日町ミナミスキー場 宿泊「いろり庵」

担当：今栄貞吉、野口和行、田中伸明（体育研究所）

参加者：42名



昨年に引き続き、体育研究所の所員がスキーの指導を担当した「スキーのつどい」。技術レベル別の講習及び、到達希望レベルによる講習を行った。授業とは違ったとても和やかな雰囲気の中で学生、教職員の懇親の輪が広がった。学生総合センターが行ったアンケートの結果も好評であった。一番楽しんだのは参加した教員かもしれない。

3. 横浜市民講座への講師派遣

日 時：平成8年11月30日（土）

場 所：慶應義塾大学日吉キャンパス

講 師：松田雅之（体育研究所）

テーマ：近代オリンピックの変遷

本年、アトランタ・オリンピックが開催され、盛大の内に幕を閉じた。今回は近代オリンピック百年の節目にあたる大会としても注目を浴びた。国際オリンピック委員会（IOC）加盟197ヶ国・地域全てが参加した初の完全五輪であった。

1896年6月23日、クーベルタンの提唱により、パリ大学ソルボンヌ講堂において世界各国の知名人、教育家、体育関係者を召集して開かれた会議によって満場一致で決議されたオリンピック（国際総合競技大会）は、13ヶ国、選手280人の参加だった第一回アテネ大会から、15,000人を超す選手団が参加する史上最大のアトランタ大会で一世紀がたった。

近代オリンピック100年を考えると、あるときは戦争による中止、テロリストの襲撃、冷戦のおおりでボイコットの応酬と、近代五輪は時代の波、国際政治のはざままで揺れ続けてきた感がある。そして現代の特徴は、商業化、プロ化した巨大化五輪といえる。

現在においては、かつての古典的なアマチュアリズムが通用する時代ではないのかも知れないし、ミスター・アマチュアとまでいわれた先々代のブランデー IOC 会長よりも、商業化、プロ化を推進してきたサマランチ方式が、一時低迷しかかっていたオリンピックを蘇らせた効果も現実には見逃せない。ただ、「五輪はカネになる」と、開催地の招致合戦が過熱したり、テレビ放映権料の高騰や独占スポンサーシップ、運動具メーカーと選手の高額契約など、巨大化をもたらした弊害もまた、軽視することはできないと思う。さらには選手も自分の商品価値を高めるために、禁止薬物のドーピングに走る原因も作り出してしまった。100年を迎えた近代オリンピックが終わり、次の100年を考えると、どこまで商業的になるのか、ナショナリズム排除の傾向はどうなるのか、そして最大の問題は、本来のオリンピック精神である「平和と協調」がいかに実現、持続して行くかであろう。

講義には、ゲストとして1936年ベルリンオリンピック棒高跳び銀メダリスト西田修平氏を招き、講座を盛り上げていただいた。

4. 所内施設の開放

1) 体育研究所3F「エクササイズスタジオ」の開放

所内施設開放の一環として、3F「エクササイズスタジオ」を授業時間以外にサークル等に開放している。平成8年度は以下の団体がエクササイズスタジオを利用した。

- ・ボクシング愛好会
- ・応援指導部チアリーディング部

2) 体育研究所1F「トレーニングルーム」の開放

所内施設開放の一環として、1F「トレーニングルーム」を授業時間以外に開放し、所員がトレーナーとなって、器具の説明、健康体力テストの実施、トレーニングプログラムの作成等を行っている。

表3-1 トレーニングルーム開放時間

	春 学 期	秋 学 期
月	10:00~17:00	10:00~17:00
火	10:00~17:00	10:00~17:00
水	終日クローズ	終日クローズ
木	10:00~14:30	10:00~14:30
金	終日クローズ	終日クローズ
土	終日クローズ	終日クローズ

表3-2 トレーニングルーム利用者数(延べ人数)

	学 生	教職員	合 計
春学期	256	82	338
秋学期	344	70	414
年 間	600	152	752

また、トレーニングルームでは、参加者を対象に以下の種目からなる健康体力テストを行っている。このテストは Health Related Physical Fitness の評価が重要であるという概念に基づき、体育研究所にて種目を選定したテストである。

健康体力テストの測定項目

・身長および体重		
・体脂肪率	身体組成	の評価測定項目
・長座位体前屈	柔軟性	〃
・30秒上体起こし(腹筋)	筋持久力	〃
・エアロバイク	心肺持久力	〃
・アネロダッシュ	下半身パワー	〃

なお、測定したデータは蓄積され、ノルムの作成や学生の体力レベルなどの研究に利用している。

編集後記

5月の連休も終え、新緑の中日吉キャンパスの学生たちは、学生として夫々の目標に向かって澁刺と生活している。

大学設置基準に伴う塾大学カリキュラム改革から保健体育の新システムでの授業開講も4年を終えた。この間、以前にはなかった三田綱町の実技授業も実施した。また、塾内のスポーツ振興を目的とした各種スポーツイベントの開催、スポーツ施設の開放をし、塾員、塾生の身体を通しての楽しみの提供を考え実施してきた。

体育研究所は、教育、研究を2本柱に考えてきた。教育においては、現在の学生のニーズにいかに対応すべきかを思考実施した結果、平成8年度の履修者数からみても年々充実し、その成果をみることができた。研究においては、個々の研究はもとより、体育研究所全体の研究テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として」に向かって動き始めた。

このように体育研究所では、塾の体育、スポーツの振興の発信源という意識の中、さらに教育研究に取り組んでいかねばと考えている。

総務委員会委員長（活動報告書編集担当）

安藤勝英